

皇居（東京都千代田区）から新たに発見された甲虫目録 —特に外来種に注目して—

野村周平^{1*}・上田衛門²・松原 豊³・亀澤 洋⁴・山崎裕志⁵・金子直樹⁶・樽宗一朗⁷・
柿添翔太郎⁸・内海幸弘⁷・大島千幸⁹

¹国立科学博物館動物研究部 〒305-0005 茨城県つくば市天久保4-1-1

*E-mail: nomura@kahaku.go.jp

²〒152-0032 東京都目黒区平町1-16-11

³〒245-0051 神奈川県横浜市戸塚区名瀬町765-2

⁴〒350-0825 埼玉県川越市月吉町32-17

⁵〒157-0073 東京都世田谷区砧1-31-12

⁶一般財団法人 自然環境研究センター 〒130-0022 東京都墨田区江東橋3-3-7

⁷千葉県立中央博物館 〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2

⁸国立科学博物館標本資料センター 〒305-0005 茨城県つくば市天久保4-1-1

⁹一般財団法人 進化生物学研究所 〒158-0098 東京都世田谷区上用賀2-4-28

A List of Newly Discovered Beetle Species from the Garden of Imperial Palace, Chiyoda, Tokyo, Japan, with Special Interest of Introduced Species

**Shûhei Nomura^{1*}, Eimon Ueda², Yutaka Matsubara³, Hiromu Kamezawa⁴, Hiroshi Yamazaki⁵,
Naoki Kaneko⁶, Sôichirô Taru⁷, Showtarô Kakizoe⁸, Yukihiko Uchiumi⁷ & Kazuyuki Oshima⁹**

¹Department of Zoology, National Museum of Nature and Science,

4-1-1 Amakubo, Tsukuba-shi, Ibaraki 305-0005, Japan

*E-mail: nomura@kahaku.go.jp

²1-16-11 Taira-machi, Meguro-ku, Tokyo 152-0032, Japan

³765-2 Nase-cho, Totsuka-ku, Yokohama-shi, Kanagawa 245-0051, Japan

⁴32-17 Tsukiyoshi-machi, Kawagoe-shi, Saitama 350-0825, Japan

⁵1-31-12 Kinuta, Setagaya-ku, Tokyo 157-0073, Japan

⁶Japan Wildlife Research Center

3-3-7 Kôtôbashi, Sumida-ku, Tokyo 130-0022, Japan

⁷Natural History Museum and Institute, Chiba,

955-2 Aoba-cho, Chûô-ku, Chiba-shi, Chiba 260-8682, Japan

⁸Center for Collections, National Museum of Nature and Science,

4-1-1 Amakubo, Tsukuba-shi, Ibaraki 305-0005, Japan

⁹The Research Institute of Evolutionary Biology,

2-4-28 Kamiyoga, Setagaya-ku, Tokyo 158-0098, Japan

Abstract. In the garden of Imperial Palace, Chiyoda, Tokyo, Japan, 929 beetle species have been known until the beginning of this inventory project (2021–2025). As the result of the inventory survey conducted from July 2021 to July 2025, 199 beetle species have been added to this checklist. Distribution in Japan or Tokyo, habitat, host plant, and behavior observed in this area and the other notes of each species were commented in this study. Nine species were regarded as introduced species, and six are doubtful.

Keywords: inventory, Coleoptera, new record, Imperial Palace, Tokyo, introduced species.

はじめに

国立科学博物館による、1996年から足掛け30年にわたる調査により、皇居（吹上御苑・道灌濠）からは、今期第Ⅲ期の開始時点で929種の甲虫が記録されていた。第Ⅰ期の調査（1996–2000）では73科731種が記録された（野村ら、2000）。2000–2003のモニタリング調査では、ハネカクシ類について5科161種を記録し（野村・丸山・新井、2006）また、地上FITによる空中浮遊性甲虫調査の結果、63科393種を報告した（野村・上條・市野澤、2006）。さらに第Ⅱ期の調査（2009–2012）では、吹上御苑内に設置した枯木積みに集まる甲虫の調査を行い、皇居未記録種18種を含む38科188種を記録した（野村・河合ら、2014）。ベートトラップを用いた大型甲虫の発生調査も行ったが、皇居のインベントリーに関して大きな変動はなかった（野村・村木・佐藤、2014）。またこの時には小島ら（2014）が衝突誘引式トラップ（いわゆるサンケイトラップ）を用いた調査を行い、61科308種の甲虫を報じている。

以上の結果、およそ900種ほどの甲虫が記録されたことが分かったが、20年の間に甲虫の分類体系があちこちで変わるなどして、全体で何種ということが不分明になった。そのため今期第Ⅲ期の調査を実施するにあたって、松原がこれまでの記録を取りまとめたところ、2022年2月段階で77科933種、さらに検討を加えて、2022年3月段階で79科929種がリストアップされた（松原、未発表）。

このチェックリストをもとに調査を進め、今期の調査においては、2021年7月から2025年7月にかけて次項に示すような多数回の調査を実施した。その結果として、以下に示すように199種に及ぶ新産種を見出したので報告する。

材料と方法

1) 一般採集のコースと方法

本調査の一般採集は、通常の自由な採集とは異なり、毎回、13:00–16:00に吹上御苑内～道灌濠の決まったコースをたどり、その沿道で、スウィーピング、ビーティング、シフティング、見つけ採り、キノコ、朽木、樹皮下のチェックなどにより採集した。またトラップ類もおおよそこの沿道に設置し、随時設置回収を行った。定期的に設置回収したトラップ類の採集成果についてはそれぞれ別稿にて記録する。毎回定例のコースは以下のとおりである（カッコ内は毎回ではなくオプション）：大宮御所正門（図1A）→覆馬場跡（図1B, C）→大滝流れ（図1D）→駐春閣跡（図1E, F）→大本営跡→果樹園（図1G, H, I）（→地主山）（→吹上大池）→大宮御所正門→道灌濠中道→中道灌濠（図1J, K）、下道灌濠（図1L）。

2) 調査の実施日と調査員

2021年度：2021年7月15日（木）：上田；10月5日（火）：上田，松原，金子，野村；10月15日（金）：上田，松原，野村；10月26日（火）：松原，山崎，野村；10月28日（木）：上田，松原，山崎，金子，樽，野村；11月11日（木）：松原，山崎，樽，野村；11月18日（木）：上田，山崎，樽，野村；11月25日（木）：上田，松原，山崎，野村；12月2日（木）：松原，山崎，樽，野村；12月16日（木）：上田，松原，山崎，樽，野村；2022年1月25日（火）：松原，山崎，樽，金子，野村；2月24日（木）：上田，松原，山崎，樽，金子，野村；3月10日（木）：上田，松原，樽，野村；3月15日（火）：上田，松原，山崎，樽，野村；3月24日（木）：上田，松原，樽，野村；3月29日（火）：上田，松原，山崎，樽，野村。

2022年度：2022年4月5日（火）：上田，松原，山崎，樽；4月14日（木）：中止；4月21日（木）：上田，松原，山崎，金子，樽，野村；4月28日（木）：松原，山崎，野村；5月12日（木）：上田，



図1. 皇居吹上御苑，道灌濠における甲虫調査環境と調査状況. A. 大宮御所正門付近の樹林; B. 覆馬場跡付近の環境; C. 同所における吊下式ライトトラップの設置; D. 大滝流れ付近の伐木; E. 駐春閣跡付近の環境; F. 白鳥堀付近の環境; G. 果樹園付近の環境; H. 同所での調査状況; I. 果樹園横の廃プールにおける調査状況; J. 中道灌濠付近の環境; K. 同所における調査状況; L. 下道灌濠付近の環境.

松原; 5月19日(木): 上田, 松原, 樽, 野村; 5月26日(木): 上田, 松原, 山崎, 樽, 野村; 5月31日(火): 松原, 山崎, 樽, 野村; 6月9日(木): 上田, 松原, 山崎, 金子, 野村; 6月16日(木): 松原, 山崎, 樽 (バナナ回収); 6月30日(木): 松原, 野村 (バナナ回収); 7月5日(火): 松原, 亀澤, 金子, 樽, 野村 (バナナ回収); 7月12日(火): 松原, 樽, 柿添, 内海 (バナナ回

収); 7月21日(木): 上田, 松原, 山崎, 金子, 内海 (バナナ回収); 7月28日(木): 上田, 松原, 金子, 内海, 野村 (バナナ回収); 8月4日(木): 金子, 樽, 内海 (バナナ回収); 8月9日(火): 上田, 松原, 樽, 内海, 野村 (バナナ回収); 8月18日(木): 上田, 松原, 山崎, 金子, 内海, 柿添, 野村 (バナナ回収); 8月25日(木): 上田, 松原, 山崎, 内海, 野村 (バナナ回収); 9月1日(木):

上田, 松原, 山崎, 樽, 内海, 野村 (バナナ回収); 9月8日 (木): 松原, 金子, 樽, 柿添, 内海 (バナナ回収); 9月15日 (木): 松原, 山崎, 内海, 柿添, 野村 (バナナ回収); 9月21日 (水): 上田, 松原, 山崎, 内海, 野村 (バナナ回収); 9月29日 (木): 上田, 松原, 野村 (バナナ回収); 10月4日 (火): 松原, 山崎, 金子, 樽, 内海, 野村; 10月13日 (木): 樽, 柿添, 野村; 10月21日 (金): 上田, 松原, 山崎; 10月27日 (木): 松原, 柿添, 野村; 11月1日 (火): 山崎, 野村; 11月15日 (火): 天候不良のため中止; 11月24日 (木): 上田, 松原, 山崎, 亀澤; 12月8日 (木): 松原, 山崎, 亀澤, 柿添; 12月22日 (木): 松原, 山崎, 亀澤, 野村; 2023年1月19日 (木): 上田, 松原, 亀澤, 内海, 柿添; 1月26日 (木): 上田, 松原, 山崎, 柿添, 内海, 野村; 2月9日 (木): 上田, 松原, 山崎, 亀澤, 柿添, 野村; 2月16日 (木): 松原, 山崎, 亀澤, 金子, 野村; 3月7日 (火): 上田, 松原, 山崎, 亀澤; 3月9日 (木): 上田, 松原, 山崎, 亀澤, 樽; 3月16日 (木): 上田, 松原, 亀澤, 柿添; 3月28日 (火): 上田, 松原, 山崎, 亀澤, 柿添。

2023年度: 2023年4月6日 (木): 上田, 松原, 山崎, 柿添, 内海; 4月13日 (木): 上田, 松原, 山崎; 4月20日 (木): 上田, 金子, 内海; 4月27日 (木): 上田, 松原, 金子; 5月11日 (木): 上田, 松原, 金子, 樽, 野村; 5月18日 (木): 上田, 松原, 山崎, 野村; 5月25日 (木): 松原, 山崎, 柿添, 野村; 5月30日 (火): 中止; 6月8日 (木): 上田, 松原, 山崎, 金子, 柿添, 大島, 野村; 6月15日 (木): 松原, 山崎, 柿添, 大島, 野村; 6月22日 (木): 松原, 樽, 大島; 6月29日 (木): 上田, 松原, 柿添, 大島; 7月6日 (木): 上田, 松原, 山崎, 亀澤, 内海, 大島; 7月13日 (木): 上田, 松原, 亀澤, 大島, 野村; 7月20日 (木): 松原, 山崎, 金子, 柿添, 大島; 7月27日 (木): 松原, 金子, 樽, 大島, 野村; 8月3日 (木): 松原, 亀澤, 金子, 柿添, 大島, 野村; 8月10日 (木): 上田, 松原, 山崎, 金子, 柿添, 大島, 野村; 8月17日 (木): 上田, 松原, 山崎, 金子, 柿添, 大島, 野村; 8月24日 (木): 上田, 金子; 8月31日 (木): 上田, 山崎, 亀澤, 内海, 大島; 9月7日 (木): 山崎, 金子, 大島, 野村; 9月14日 (木): 上田, 山崎, 亀澤, 大島, 野村; 9月21日 (木): 大島, 野村; 9月28日 (木): 上田, 大島, 野村; 10月3日 (火): 上田, 松原, 山崎,

大島; 10月10日 (火): 中止; 10月24日 (火): 上田, 松原, 山崎, 大島, 野村; 10月31日 (火): 上田, 山崎, 柿添, 野村; 11月7日 (火): 山崎, 樽, 大島, 野村; 11月14日 (火): 上田, 松原, 亀澤, 金子; 11月21日 (火): 山崎, 亀澤, 樽, 大島, 野村; 11月28日 (火): 上田, 松原, 山崎, 亀澤, 樽, 柿添, 大島, 野村; 12月5日 (火): 松原, 山崎, 亀澤, 柿添, 大島; 12月12日 (火): 中止; 12月19日 (火): 松原, 山崎, 亀澤, 柿添, 大島, 野村; 12月26日 (火): 上田, 松原, 山崎, 野村; 2024年1月9日 (火): 上田, 松原, 山崎, 大島, 野村; 1月23日 (火): 亀澤, 柿添; 2月6日 (火): 天候不順のため中止; 2月22日 (木): 中止; 3月4日 (月): 中止; 3月12日 (火): 中止; 3月19日 (火): 上田, 松原, 山崎, 亀澤, 樽, 柿添, 大島, 野村; 3月26日 (火): 中止。

2024年度: 2024年4月4日 (木): 上田, 松原, 山崎, 亀澤, 金子, 大島, 野村; 4月11日 (木): 松原, 亀澤, 大島, 野村; 4月18日 (木): 上田, 松原, 山崎, 亀澤, 柿添, 大島, 野村; 4月25日 (木): 上田, 松原, 亀澤, 柿添, 大島; 5月9日 (木): 上田, 松原, 亀澤, 金子, 樽, 柿添, 大島, 野村; 5月23日 (木): 上田, 松原, 亀澤, 柿添, 野村; 5月30日 (木): 上田, 松原, 内海; 6月6日 (木): 上田, 松原, 山崎, 亀澤; 6月14日 (金): 上田, 松原, 亀澤, 金子, 樽, 柿添, 大島; 6月20日 (木): 松原, 山崎, 亀澤, 柿添, 大島; 6月28日 (金): 柿添, 大島; 7月4日 (木): 松原, 大島; 7月11日 (木): 松原, 山崎, 柿添, 大島; 7月18日 (木): 松原, 金子, 大島, 野村; 7月25日 (木): 上田, 松原, 亀澤, 金子, 柿添, 大島, 野村; 8月1日 (木): 上田, 松原, 山崎, 金子, 樽, 柿添; 8月8日 (木): 上田, 松原, 亀澤, 大島; 8月15日 (木): 金子, 柿添, 大島, 野村; 8月22日 (木): 上田, 松原, 柿添, 大島; 8月29日 (木): 上田, 松原, 山崎, 金子, 大島; 9月5日 (木): 上田, 山崎, 大島, 野村; 9月12日 (木): 上田, 山崎, 金子, 大島; 9月19日 (木): 上田, 山崎, 柿添, 大島; 9月26日 (木): 上田, 松原, 山崎, 金子, 樽, 柿添, 大島, 野村; 10月3日 (木): 上田, 松原, 山崎, 内海; 10月10日 (木): 上田, 松原, 亀澤, 柿添, 野村; 10月17日 (木): 上田, 松原, 亀澤, 樽, 野村; 10月24日 (木): 上田, 松原, 山崎, 亀澤, 樽, 柿添, 松原; 10月31日 (木): 上田, 松原, 亀澤, 金子,



図2. 皇居から新たに記録される甲虫の生態写真. A. オオシモフリコメツキ; B. タイワンヒメトゲムシ; C. シラホシハナムグリ; D. アヤオビハナムミ; E. カメノコテントウ; F. ルリオオキノコ; G. アカチビケシキスイ; H. アシナガオニゾウムシ; I. イワサキケブカカミキリ; J. ラミーカミキリ; K. クズクビソハムシ; L. イノコヅチカメノコハムシ.

内海, 大島, 野村; 11月7日(木): 松原, 山崎, 亀澤; 11月14日(木): 上田, 松原, 山崎, 大島; 11月21日(木): 上田, 松原, 山崎; 11月28日(木): 上田, 松原, 山崎, 亀澤, 野村; 12月5日(木): 上田, 松原, 山崎, 亀澤, 野村; 12月12日(木): 上田, 松原, 亀澤, 樽; 12月19日(木): 上田, 松原, 山崎, 亀澤, 金子, 内海, 大島, 野村; 12月26日(木): 上田, 松原, 山崎, 亀澤,

野村; 2025年1月21日(火): 上田, 松原, 山崎, 亀澤, 野村; 1月28日(火): 上田, 松原, 山崎, 亀澤, 柿添, 野村; 2月4日(火): 上田, 松原, 山崎, 亀澤, 樽, 野村; 2月27日(木): 松原, 山崎, 亀澤, 柿添; 3月6日(木): 上田, 松原, 亀澤, 内海, 野村; 3月13日(木): 上田, 松原, 山崎, 亀澤, 野村; 3月18日(火): 松原, 亀澤, 金子, 樽, 野村; 3月26日(水): 上田, 松原, 山

崎, 亀澤, 金子, 樽, 柿添, 内海, 大島.

2025年度: 2025年6月10日(火): 松原, 山崎, 樽, 柿添, 内海, 野村; 6月13日(金): 松原, 柿添, 内海, 野村; 6月20日(金): 上田, 松原, 山崎, 柿添, 内海, 野村; 7月1日(火): 上田, 松原, 柿添, 内海, 野村; 7月10日(木): 上田, 松原, 山崎, 樽, 柿添, 内海; 7月14日(月): 松原, 山崎, 柿添, 内海.

3) 甲虫採集のために使用したトラップ

本調査では, 上記に示した一般採集の他に, 各種トラップを用いて, 甲虫の採集を行った. 特定の甲虫グループの調査のために定期的に設置回収したトラップの仕様, 設置状況については別稿に示すとおりである. それ以外のトラップについては, 以下に示すとおりである. 山崎は駐春閣跡付近(2022年), 果樹園付近(2022年, 2023年), 覆馬場跡(2024年, 2025年)に吊下式ライトトラップ, 駐春閣跡付近(2022年), 果樹園付近(2022年, 2023年)に羽毛トラップを設置し, 定例採集のたびに回収, 再設置を行った. 吊下げ式ライトトラップは電池式のLEDを光源に用いた自作のものである. また羽毛トラップについては, 市販の羽毛枕の羽毛を利用し, 洗濯ネットに入れた羽毛トラップを床に設置する方法で行った.

皇居初記録甲虫種目録

以下に, 2021–2024年度の調査で皇居から新たに確認された甲虫類の種リストを掲げる. 各種を同定し, 確認した調査員の名前は以下のように略記し, 採集データ内に付す: KM: 亀澤洋; KN: 金子直樹; M: 松原豊; N: 野村周平; UC: 内海幸弘; UE: 上田衛門; Y: 山崎裕志. 採集法については解説コメント中に記述した. 特記しない場合は一般採集による. また, 皇居内の詳しい採集地点がわかる場合には特記した.

科, 亜科(ただし亜科は省略)の配列はCai *et al.* (2022)に従い, それより下のタクサ内の配列は旧北区カタログ等を参考にした. 各種に関連する引用文献は各種項目の末尾に示した.

ゲンゴロウ科 Dytiscidae

1. ニセコウバツブゲンゴロウ *Laccophilus yoshitomii* Watanabe et Kamite, 2018

亀澤ら(2025)によって皇居から記録されるとともに, 過去に皇居から記録されていたコウバツ

ブゲンゴロウ *L. kobensis* Sharp, 1873に関しては, 一部が本種と再同定されたことから, 記録の抹消を提唱した. その後, 吹上御苑の白鳥堀付近の池で多数個体が確認された.

<採集データ> 10 exs. KM, 26. iii. 2025.

オサムシ科 Carabidae

2. ケブカゴモクムシ *Harpalus (Pseudoophonus) pseudoophonoides* Schauberger, 1930 (図3A)

皇居では吹上御苑の観瀑亭前の草地で比較的多くみられた. これまで本種の和名としてニセケゴモクムシが使われてきたが, 酷似種が混じっていることが報告され, 和名が変更されている(森田, 2018). 東京都からの記録は多くはない. ただし, 酷似種の存在が考慮されていない時代の記録のため, 過去記録は標本に遡る必要性が指摘されている.

<採集データ> 1 ex. KM, 12. xii. 2024.

3. ヒコサンツヤゴモクムシ *Trichotichnus (Trichotichnus) noctuabundus* Habu, 1954 (図3B)

12~3月に下道灌濠の土手(草刈後の緩斜面)で多くが採集された. タイプロカリティは福岡県英彦山. 東京都からは山地で得られているほか, 大田区(笠原, 1984)でも確認されている. 近似種がいるため同定が難しく, 生態も不明なため, 採集例が少ない. 秋季に灯火で採集されるケースが多いようだが, 皇居のような平地では冬季でも活動している可能性が採集状況から示唆された. 亀澤は2023年2月16日に採集した個体を埼玉県川越市内に生かして持ち帰り, 暖房のない室内で観察したところ, 採集当日と翌日の深夜に飼育容器内で交尾していることを確認した. 交尾行動が確認された時間の室内気温は10°C前後だったことから, 関東地方の平野部では本種は休眠せずに活動的な状態で越冬していると考えられる. 本種を含む日本産 *Trichotichnus* 属における冬季の活動的な生態については, 齋藤(2024)が言及している.

<採集データ> 2 exs. 岸田康則採集, 28. vi. 2022; 2 exs. KM, 8. xii. 2022; 6 exs. KM, 22. xii. 2022; 14 exs. KM, 19. i. 2023; 1 ex. UE, 26. i. 2023; 2 exs. KM, 2 exs. UE, 9. ii. 2023; 4 exs. KM, 16. ii. 2023; 3 exs. KM, 7. iii. 2023; 4 exs. KM, 9. iii. 2023; 2 exs. KM, 28. iii. 2023; 1 ex. KM, 19. xii. 2024; 1 ex. KM, 18. iii. 2025.

4. ムネアカマメゴモクムシ *Stenolophus (Stenolophus) propinquus* Morawitz, 1862 (図3C)
 観瀑亭前の小川沿いの草地から採集された。本種は草地の湿潤な地表に普通に見られるが、これまで皇居からの記録はなかった。
 <採集データ> 1 ex. UE, 23. v. 2024.
5. スジミズアトキリゴミムシ *Apristus grandis* Andrewes, 1937 (図3D)
 坂下門入り口近くのアスファルト上で採集された。本種は海岸や河原などの砂利におおわれた裸地環境で普通に見られるが、これまで皇居からの記録はなかった。
 <採集データ> 1 ex. UE, 24. xi. 2022.
6. コキノコゴミムシ *Coptodera (Coptoderina) japonica* Bates, 1883
 吊下式ライトトラップにて採集。東日本での記録は少なく、東京都では町田市(雛倉, 2013)と稲城市(伊藤, 2023)だけと思われるが、山崎の観察によれば近年多摩地域などではナラ枯れ後のカワラタケ類が発生した立ち枯れで見る機会が多い。
 <採集データ> 1 ex. Y, 16. vi. 2022.
7. ヤセアトキリゴミムシ *Mochtherus luctuosus* Putzeys, 1875 (図3E)
 東京都からは奥多摩、稲城市から記録があるほか土生コレクションにも浅川(現八王子市)の標本が含まれる。枯れ木の表面から見つかる夜行性の種で、少ない種ではない。吹上御苑では枯れ木が積まれた場所などで確認されたほか、吊下式ライトトラップでも確認されている。
 <採集データ> 1 ex. KM, 10. iii. 2022; 1 ex. Y, 26. v. 2022; 1 ex. Y, 31. v. 2022; 1 ex. Y, 21. vii. 2022; 1 ex. Y, 25. viii. 2022; 1 ex. UE, 17. viii. 2023; 1 ex. UE, 19. ix. 2024; 1 ex. KM, 10. x. 2024.
8. チビカタキバゴミムシ *Badister (Baudia) marginellus* Bates, 1873
 異名 *nakayamai* は、Morita (1992) によって記載され、東京都大田区池上がタイプロカリティ。区部では他に渋谷区の明治神宮(岡田ら, 2013)、港区の自然教育園(野村ら, 2019)からも確認されている。平地だけではなく、山地でもガレ場などで見つかる。吹上御苑の果樹園付近で林縁のリーターのシフティングにより採集された。
 <採集データ> 1 ex. KM, 9. iii. 2023; 1 ex. KM, 28. iii. 2023; 1 ex. KM, 14. xi. 2023; 1 ex. UE, 28. xi. 2023.
9. ハラアカモリヒラタゴミムシ *Eucolpodes japonicum japonicum* (Motschulsky, 1860)
 河川や池沼近くのやや湿潤な環境を好むようであるが森林環境でも見つかることがある。果樹園付近に設置した吊下式ライトトラップでも採集されている。
 <採集データ> 1 ex. Y, 28. iv. 2022; 1 ex. Y, 10. viii. 2023.
10. ヒロムネナガゴミムシ *Pterostichus (Argutor) dulcis* (Bates, 1883)
 中道灌漑の湿地で採集された。湿地性の種で、産地では概して少なくないが、分布は比較的限られ、関東地方では、渡良瀬遊水地、荒川水系、箱根仙石原などから知られる。東京都下では1950年代の練馬区で複数個体が確認されているが(吉武ら, 2011)、その後は山本・渡辺(2009)により多摩川流域(稲城市)からの2004年の採集例がある程度。本種が区部に残存していたことは注目に値する。
 <採集データ> 1 ex. KM, 14. ix. 2023.
11. アシミヅナガゴミムシ *Pterostichus (Argutor) sulcitaris* Morawitz, 1862
 中道灌漑の湿地などで確認。平地から低山地の湿性草地を中心に、湿潤な地表に普通の種で一般に個体数も多いが、皇居からはこれまで記録されていなかった。
 <採集データ> 2 exs. UE, 18. v. 2023; 3 exs. KM, 14. ix. 2023; 1 ex. KM, 14. xi. 2023; 1 ex. UE, 28. xi. 2023.
12. コガシラナガゴミムシ *Pterostichus (Rhadagus) microcephalus* (Motschulsky, 1860)
 森林から草地、耕作地まで多様な環境にみられる普通種だが、なぜか皇居ではこれまで確認されていなかった。下道灌漑の土手で板切れ下から、吹上御苑の細流脇の湿った落葉下、下道灌漑の草地環境の石下などから採集した。
 <採集データ> 2 exs. UE, 7. iii. 2023; 1 ex. KM, 9. iii. 2023; 1 ex. UE, 16. iii. 2023; 1 ex. KM, 28. iii.

2023; 1 ex. KM, 14. xi. 2023; 2 exs. UE, 4. iv. 2024; 1 ex. UE, 24. iv. 2024; 1 ex. UE, 16. v. 2024; 1 ex. KM, 1 ex. UE, 23. v. 2024; 1 ex. UE, 6. vi. 2024.

13. セアカヒラタゴミムシ *Dolichus halensis* (Schaller, 1783)

草地から耕作地にみられる普通種で一般に個体密度も高いが、皇居ではこれまで確認されていなかった。

<採集データ> 1 ex. N, 27. v. 2022; 1 ex. KM, 20. vi. 2024; 1 ex. UE, 22. viii. 2024; 1 ex. KM, 17. x. 2024.

14. マルガタゴミムシ *Amara (Amara) chalcites* Dejean, 1828

中道灌漑端の草地から採集された。よく似た近似種がいくつかあるが、雄交尾器および上翅の微細印刻などを検することにより同定した。

<採集データ> 1 ex. UE, 14. ix. 2023.

15. コマルガタゴミムシ *Amara (Bradytus) simplicidens* Morawitz, 1863

多様な環境にみられる普通種だが、皇居からはこれまで記録されていなかった。東京都の区部からは、大田区や板橋区、世田谷区などから記録されている（大田区, 1997; 東京都板橋区, 1991; みつ池を育てる会, 2019）。

<採集データ> 1 ex. Y, 7. iii. 2023; 1 ex. KM, 28. iii. 2023; 1 ex. Y, 17. viii. 2023; 1 ex. Y, 31. viii. 2023; 1 ex. Y, 29. viii. 2024; 1 ex. Y, 28. xi. 2024.

マルハナノミ科 Scirtidae

16. チャイロチビマルハナノミ *Contacyphon consobrinus* (Nyholm, 1950) (図3F)

道灌漑に面した樹木のピーティングで得られた。これまで皇居からは *Cyphon* 属しか記録されていなかったが、今期調査で得られた個体を検討したところ次種を含め、2種が確認された。*Cyphon* 属は紆余曲折を経たのち、現在はいくつかの属に細分され、解体されている。経緯については吉富 (2015) に詳しい。同定は、次種とともに Yoshitomi (2005) をもとに行った。千葉県、栃木県など近県からは記録があるが、東京都からは記録が見当たらない。

<採集データ> 1 ex. KM, 16. xii. 2021.

17. ニッポシチビマルハナノミ *Contacyphon nipponicus* (Yoshitomi, 2005) (図3G)

白鳥堀付近の池畔の落葉リターのシフティングで得られた。前種同様、これまで皇居からは属レベルの記録しかなかったグループを、今期調査で得られた標本をもとに検討した結果、本種が確認された。区部からは明治神宮から記録されている（岡田ら, 2013）。

<採集データ> 1 ex. KM, 21. i. 2025.

マルトゲムシ科 Byrrhidae

18. シラフチビマルトゲムシ *Simplocaria (Simplocaria) hispidula* Fairmaire, 1886 (図3H)

上道灌漑近くの石垣下の落ち葉のシフティングにより採集された。都区部では板橋区などから記録されている（東京都板橋区, 1991）が、上田の観察によれば、都区部市街地において普通に見られる種である。皇居内における調査対象地には本種の生息に適する場所（オープンで苔の生えた地面）が少ないことが、これまで未記録であった理由であると思われる。

<採集データ> 1 ex. UE, 24. x. 2024.

タマムシ科 Buprestidae

19. フチトリヒメヒラタタマムシ *Anthaxia (Haplantaxia) rubromarginata* Miwa et Chûjô, 1935 (図3I)

果樹園周辺のクヌギの梢のスウィーピングにより得られた。東京都区部では大田区東京港野鳥公園（高桑ら, 2018）から記録がある。

<採集データ> 2 exs. UE, 6. iv. 2023.

20. オオウグイスナガタマムシ *Agrilus asiaticus igai* Y. Kurosawa, 1963 (図3J)

果樹園周辺のクヌギの葉のスウィーピングにより確認された。区部からは成城みつ池、東京港野鳥公園、明治神宮、自然教育園から記録されている。

<採集データ> 1 ex. KM, 6. vii. 2023; 1 ex. UE, 9. v. 2024; 1 ex. UE, 6. vi. 2024; 1 ex. Y, 20. vi. 2025.

21. ムネアカナガタマムシ *Agrilus imitans* Lewis, 1893
在来種（国内外来または北上種?）

主に西日本に分布する種で、近年関東地方の平地部でも普通に見られるようになってきた。エノキの衰弱木や新しい伐採枝などに集まる。枯れ枝が積んである近く設置した吊下式ライトトラップ

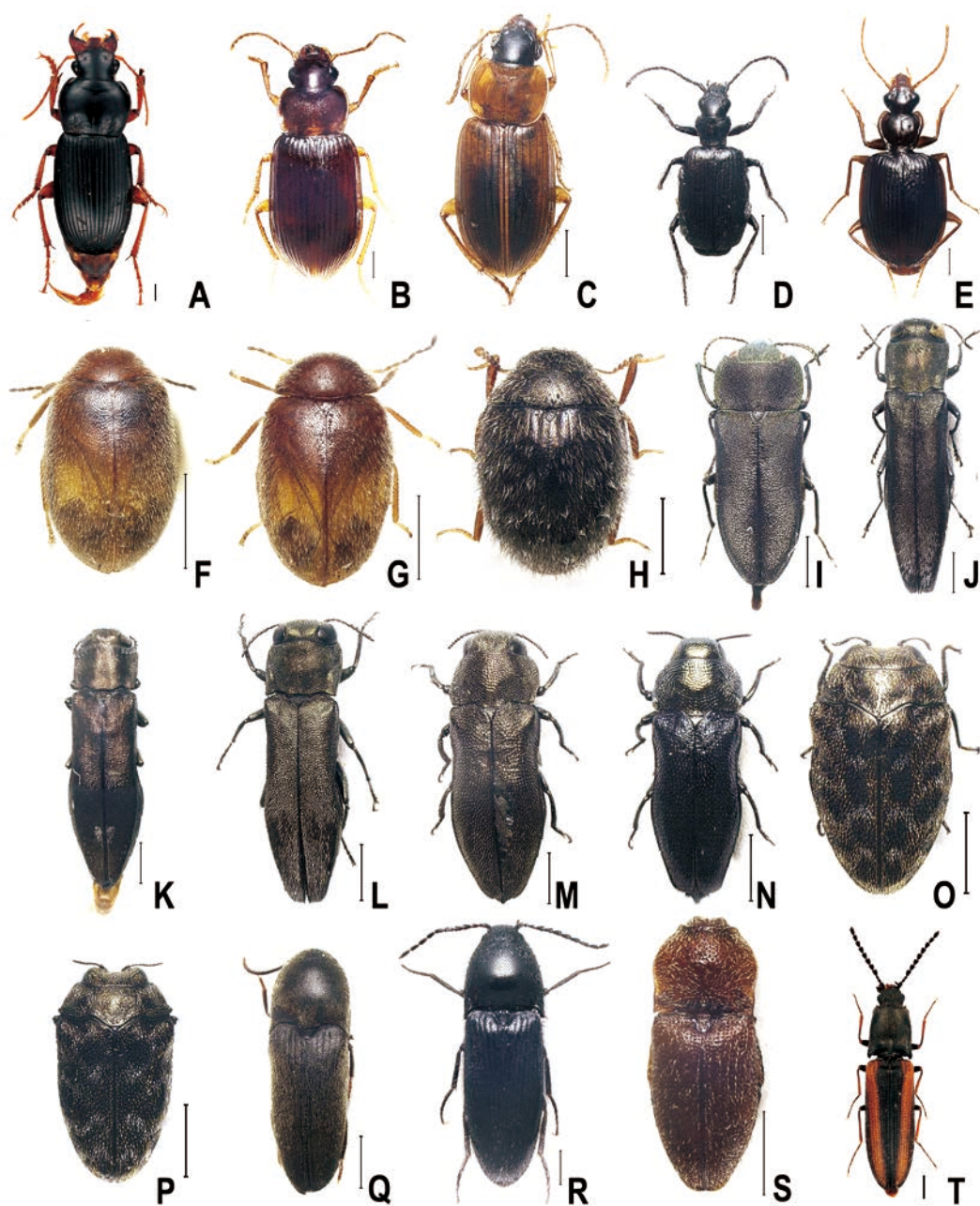


図3. 皇居から新たに記録される甲虫の標本写真1. A. ケブカゴモクムシ; B. ヒコサンツヤゴモクムシ; C. ムネアカマメゴモクムシ; D. スジミズアトキリゴミムシ; E. ヤセアトキリゴミムシ; F. チャイロチビマルハナノミ; G. ニッポンチビマルハナノミ; H. シラフチビマルトゲムシ; I. フチトリヒメヒラタタムシ; J. オオウグイスナガタムシ; K. シロテンナガタムシ; L. ヒコサンナガタムシ; M. カラカネチビナカボソタムシ; N. ムネアカチビナカボソタムシ; O. マルガタチビタムシ; P. マメチビタムシ; Q. コヒメミゾコメツキダマシ; R. ヒメクロコメツキ; S. イチハシチビサビキコリ; T. タテスジカネコメツキ. スケールはすべて1 mm.

で確認した。

<採集データ> 1 ex. Y, 20. vi. 2025.

22. シロテンナガタマムシ *Agrilus sospes* Lewis, 1893 (図3K)

主に丘陵地から山地に分布するが平地でもケヤキの伐採枝などがあると見ることができる。皇居では未確認であったが果樹園付近の林内に設置した吊下式ライトトラップで確認した。

<採集データ> 1 ex. Y, 26. v. 2022.

23. ヒコサンナガタマムシ *Agrilus yamabusi* Miwa et Chûjô, 1940 (図3L)

カジノキの梢のスウィーピングにより得られた。直ぐ近くに本種の食樹の一つのミズキがあったので、カジノキには一時的に止まっていたものと思われる。本種は都区部では大田区と自然教育園から記録されている（大田区, 1997; 野村ら, 2019）。

<採集データ> 1 ex. UE, 1. vii. 2025.

24. カラカネチビナカボソタマムシ *Nalanda ohbayashii* Y. Kurosawa, 1957 (図3M)

オニグルミの梢のスウィーピングにより採集した。本種は都区部では世田谷区から記録されている（渡辺, 2015）。

<採集データ> 5 exs. UE, 30. v. 2024; 3 exs. UE, 6. vi. 2024.

25. ムネアカチビナカボソタマムシ *Nalanda rutilicollis rutilicollis* (Obenberger, 1914) (図3N)

本種はアカメガシワの葉上で確認されることが多く、皇居でも駐春閣跡脇のアカメガシワ葉上から確認できた。

<採集データ> 1 ex. UE, 14. vi. 2024; 1 ex. Y, 20. vi. 2024.

26. マルガタチビタマムシ *Trachys ineditus* E. Saunders, 1873 (図3O)

ピーティングおよび冬場のムクノキの樹皮めくりにより採集した。皇居内にはホストであるムクノキは多い。

<採集データ> 1 ex. UE, 15. iii. 2022; 1 ex. UE, 26. xii. 2023; 1 ex. UE, 26. xii. 2024; 1 ex. Y, 26. iii. 2025; 1 ex. Y, 10. vii. 2025.

27. マメチビタマムシ *Trachys reitteri* Obenberger, 1930 (図3P)

果樹園周辺のスウィーピングにより確認された。東京都からは八王子市、あきる野市、稲城市、西東京市などのほか、区部からも港区、北区、板橋区、世田谷区、杉並区、江戸川区などから記録されている。

<採集データ> 1 ex. KM, 25. vii. 2024; 1 ex. UE, 5. ix. 2024; 1 ex. UE, 26. ix. 2024.

コメツキダマシ科 Eucnemidae

28. コヒメミヅコメツキダマシ *Dromaeolus brevipes* Fleutiaux, 1923 (図3Q)

類似種が多く同定が困難なことから記録は少ないが、山崎は都区部の公園や緑地の樹林等において吊下式ライトトラップにより多数の個体を観察している。皇居においても6月から9月の間、吊下式ライトトラップで多くの個体を確認したほか、枯れ木積みルッキングにより採集した。

<採集データ> 15 exs. Y, 21. vii. 2022; 6 exs. Y, 18. viii. 2022; 2 exs. Y, 15. ix. 2022; 8 exs. Y, 20. vii. 2023; 5 exs. Y, 10. viii. 2023; 11 exs. Y, 11. vii. 2024; 18 exs. Y, 20. vi. 2025; 1 ex. UE, 10. vii. 2025.

29. オオチャイロコメツキダマシ *Fornax victor* Fleutiaux, 1923

大型のコメツキダマシで都区部の他の緑地でも確認されているが個体数は少ない。皇居では林内に設置した吊下式ライトトラップで7月に採集された。

<採集データ> 2 exs. Y, 6. vii. 2023; 1 ex. Y, 11. vii. 2024; 1 ex. Y, 14. vii. 2025.

コメツキムシ科 Elateridae

30. ヒメクロコメツキ *Ampedus (Miwaelater) carbunculus* (Lewis, 1879) (図3R)

カエデの花掬いにより得た。普通種ながら都区部では少なく、明治神宮からの記録（岡田ら, 2013）があるのみである。

<採集データ> 1 ex. UE, 4. iv. 2024.

31. クロクシコメツキ *Melanotus (Melanotus) senilis senilis* Candèze, 1865

主に春季から梅雨期にかけて草地や林縁で確認でき、都区部でも普通に見ることができるが皇居では確認されていなかった。今回は草地や林縁の

スウィーピング、ビーティング、吊下式ライトトラップなどで確認している。

<採集データ> 1 ex. Y, 28. iv. 2022; 1 ex. UE, 18. v. 2023; 1 ex. UE, 6. vi. 2024; 1 ex. Y, 20. vi. 2025.

32. イチハシチビサビキコリ *Adelocera ichihashii* Ôhira, 1978 (図3S)

吊下式ライトトラップにて採集されたほか、枯れ木積みからも得られた。都区部でも公園や緑地の落葉広葉樹林で観察している。区部では明治神宮、世田谷区から記録されている。

<採集データ> 1 ex. Y, 21. iv. 2022; 3 exs. Y, 28. iv. 2022; 2 exs. Y, 26. v. 2022; 1 ex. Y, 18. viii. 2022; 1 ex. UE, 17. viii. 2023; 1 ex. KM, 25. iv. 2024; 1 ex. KM, 23. v. 2024; 4 exs. Y, 20. vi. 2024; 2 exs. Y, 1. viii. 2024.

33. カタモンホソツヤハダコメツキ *Athousius humeralis* (Miwa, 1927)

ホソツヤハダコメツキとも呼ばれている。山地性の種とされており、皇居のような低地での確認は注目に値する。東京都からの記録もないようである。雄交尾器の写真を鈴木互氏に確認いただき本種と確定した。夏季に採集しているが採集状況は不明である。

<採集データ> 1 ex. Y, 1. viii. 2024.

34. タテスジカネコメツキ *Gambrinus vittatus* (Candèze, 1873) (図3T)

東京都からは、奥多摩、稲城市、町田市から記録がある。皇居ではサクラ類の下枝のビーティングで採集された。

<採集データ> 2 exs. KM, 5. vi. 2022.

35. オオシモフリコメツキ *Actenicerus (Acnitecerus) orientalis* (Candèze, 1889) (図2A)

主に春に出現するコメツキで草地の上に止まっていることが多い。東京都区部の他の緑地でも確認されており、春季の草地や樹木のスウィーピングで採集されている。同定には大平・下山 (1989) を参照した。

<採集データ> 1 ex. Y, 21. iv. 2022; 2 exs. Y, 28. iv. 2022; 1 ex. UE, 6. iv. 2023; 1 ex. UE, 20. iv. 2023.

ヒメトゲムシ科 *Nosodendridae*

36. タイワンヒメトゲムシ *Nosodendron (Dendrodipnis) taiwanense* Yoshitomi, Kishimoto et Lee, 2015
在来種? (図2B, 4A)

本州、石垣島、西表島に分布 (国外は台湾本土、緑島に分布) (Yoshitomi *et al.*, 2015)。従来、本種を含む日本産 *Dendrodipnis* 亜属の種は分布が重ならないとされてきた。しかし、横浜市からクロヒメトゲムシ *N. (D.) coenosum* (Wollaston, 1873) と本種の2種が記録され (齋藤・大木, 2023)、国内分布の実態が明らかにされつつある。皇居からは過去にクロヒメトゲムシも記録されているが、少なくともその一部は再同定の結果、本種とされているため (伊藤ら, 2024)、皇居からのクロヒメトゲムシの記録は新たに確認されるまではいったん抹消すべきであろう。もともと分布していた種なのかは不明であるが、1958年に奈良県で採集された標本も確認されていることから (中村, 2024)、確認の歴史はごく浅いが、少なくとも近年に侵入した外来種ではない。

<採集データ> 1 ex. UE, 7. iii. 2023; 10 exs. KM, 2 exs. UE, 28. iii. 2023; 2 exs. Y, 8. vi. 2023; 6 exs. UE, 14. ix. 2023; 14 exs. KM, 19. xii. 2023; 7 exs. Y, 9. i. 2024; 33 exs. KM, 19. iii. 2024; 1 ex. Y, 20. vi. 2025.

エンマムシ科 *Histeridae*

37. アカチビヒラタエンマムシ *Paromalus (Paromalus) omineus* Lewis, 1892 (図4B)

伐採されて積まれた枯れ木上に静止しているところを得た。同定は大原 (1997) に拠った。東京都本土部では稲城市からの記録がある (伊藤, 2013) が、区部からはこれまで未記録である。

<採集データ> 1 ex. UE, 10. viii. 2023.

38. フジチビヒラタエンマムシ *Platylomalus fujisanus* (Lewis, 1892) (図4C)

果樹園付近の枯草堆積のシフティング及び覆馬場跡の枯れ枝が積まれた近くに設置した吊下式ライトトラップで確認された。東京都からは奥多摩地域 (芳賀, 2007; 野村, 2011) のほか、区部からは世田谷区から記録されている (みつ池を育てる会, 2019)。

<採集データ> 1 ex. KM, 14. xi. 2023; 1 ex. Y, 20. vi. 2025.

39. キノコセスジエンマムシ *Onthophilus flavicornis* Lewis, 1884 (図4D)

東京都区部では世田谷区, 目黒区, 渋谷区 (明治神宮) から見ついているが, 高尾山, 奥多摩地域の山地でも広くみられる. 皇居では覆馬場跡付近のタヌキ溜め糞場のシフティングで採集されている.

<採集データ> 1 ex. KM, 16. xii. 2021; 6 exs. Y, 15. iii. 2022; 6 exs. Y, 29. iii. 2022; 1 ex. Y, 16. ii. 2023; 3 exs. Y, 7. iii. 2023; 2 exs. KM, 23. i. 2024; 4 exs. KM, 19. iii. 2024; 5 exs. KM, 4. iv. 2024 ; 1 ex. Y, 28. i. 2025.

40. チュウジョウチビエンマムシ *Baconia chujoi* (Cooman, 1941) (図4E)

冬場にケヤキの樹皮下から採集された. 都区部では世田谷区, 明治神宮などからの記録がある (沢田, 1989; 岡田ら, 2013).

<採集データ> 1 ex. UE, 26. xii. 2024.

41. ツヤマルエンマムシ *Atholus pirithous* (Marseul, 1873) (図4F)

動植物質の腐敗物や糞などに集まり, そこで発生しているハエなどの幼虫を食している. 都区部では圧倒的にコエンマムシが多いが稀に本種が確認できる. タヌキのため糞のシフティングにより採集した.

<採集データ> 1 ex. UE, 10. x. 2024; 1 ex. Y, 24. x. 2024.

42. ヒメツヤエンマムシ *Hister simplicisternus* Lewis, 1879 (図4G)

草地のスウィーピングにより得た. 都区部各地から記録されている.

<採集データ> 1 ex. UE, 31. viii. 2023.

43. オオヒラタエンマムシ *Hololepta (Hololepta) amurensis* Reitter, 1879 (図4H)

枯れ木積みや吊下式ライトトラップにて採集. トラップ設置個所に隣接して伐採木が集積されており, そこから飛来したものと思われる. 東京都本土部では奥多摩から記録がある (芳賀, 2007) が, 区部からは新記録となる. また大型コガネムシ類調査のバイトトラップでも採集された.

<採集データ> 1 ex. UE, 25. xi. 2021; 1 ex. N, 30. vi. 2022; 1 ex. Y, 1 ex. UE, 21. vii. 2022; 1 ex. KN, 28.

vii. 2022; 1 ex. N, 18. vii. 2024.

ガムシ科 Hydrophilidae

44. ヒメセマルガムシ *Coelostoma (Coelostoma) orbiculare* (Fabricius, 1775) (図4I)

中・下道灌漑の湿地で採集された. これまで皇居からはセマルガムシ *C. (Holocoelostoma) stultum* (Walker, 1858) だけが確認されていた (野村ら, 2000). 両種とも東京都本土版のレッドデータブックで絶滅危惧IA類 (CR) という高いランクで評価されている (東京都環境局, 2023). 東京都からは大田区で確認されているほか (大田区, 1997), 稲城市から記録されている (伊藤, 2016).

<採集データ> 1 ex. KM, 19. i. 2023; 4 exs. KM, 13. vii. 2023; 1 ex. KM, 3. viii. 2023; 4 exs. KM, 14. ix. 2023.

45. コセスジハバピロガムシ *Dactylosternum abdominale* (Fabricius, 1792) 在来種? (図4J)

クヌギの発酵した樹液から得られた. 汎世界的な分布を示す種であるが, 都区部からは板橋区から記録がある程度である (東京都板橋区, 1991).

<採集データ> 1 ex. KM, 19. xii. 2023.

コブスジコガネ科 Trogidae

46. ヒメコブスジコガネ *Glyptotrox opacotuberculatus* (Motschulsky, 1860) (図4K)

2か所に設置した羽毛トラップで複数個体が採集されたほか, タヌキのため糞場でも採集された. 都区部でも樹林のある緑地や公園に羽毛トラップを設置することで採集できる (野村ら, 2019).

<採集データ> 3 exs. Y, 21. iv. 2022; 8 exs. Y, 28. iv. 2022; 5 exs. Y, 26. v. 2022; 8 exs. Y, 31. v. 2022; 4 exs. Y, 9. vi. 2022; 1 ex. Y, 16. vi. 2022; 2 exs. KM, 28. iii. 2023 ; 1 ex. Y, 8. vi. 2023.

コガネムシ科 Scarabaeidae

47. セマダラマガソコガネ *Aphodaulacus nigrotessellatus* Motschulsky, 1866 (図4L)

冬から早春にかけて普通に見られる種であるが, 皇居ではその時期にタヌキのため糞を探し出すことにより見つかる.

<採集データ> 1 ex. UE, 24. ii. 2022; 1 ex. UE, 15. iii. 2022; 1 ex. UE, 24. iii. 2022; 2 exs. Y, 16. ii. 2023;

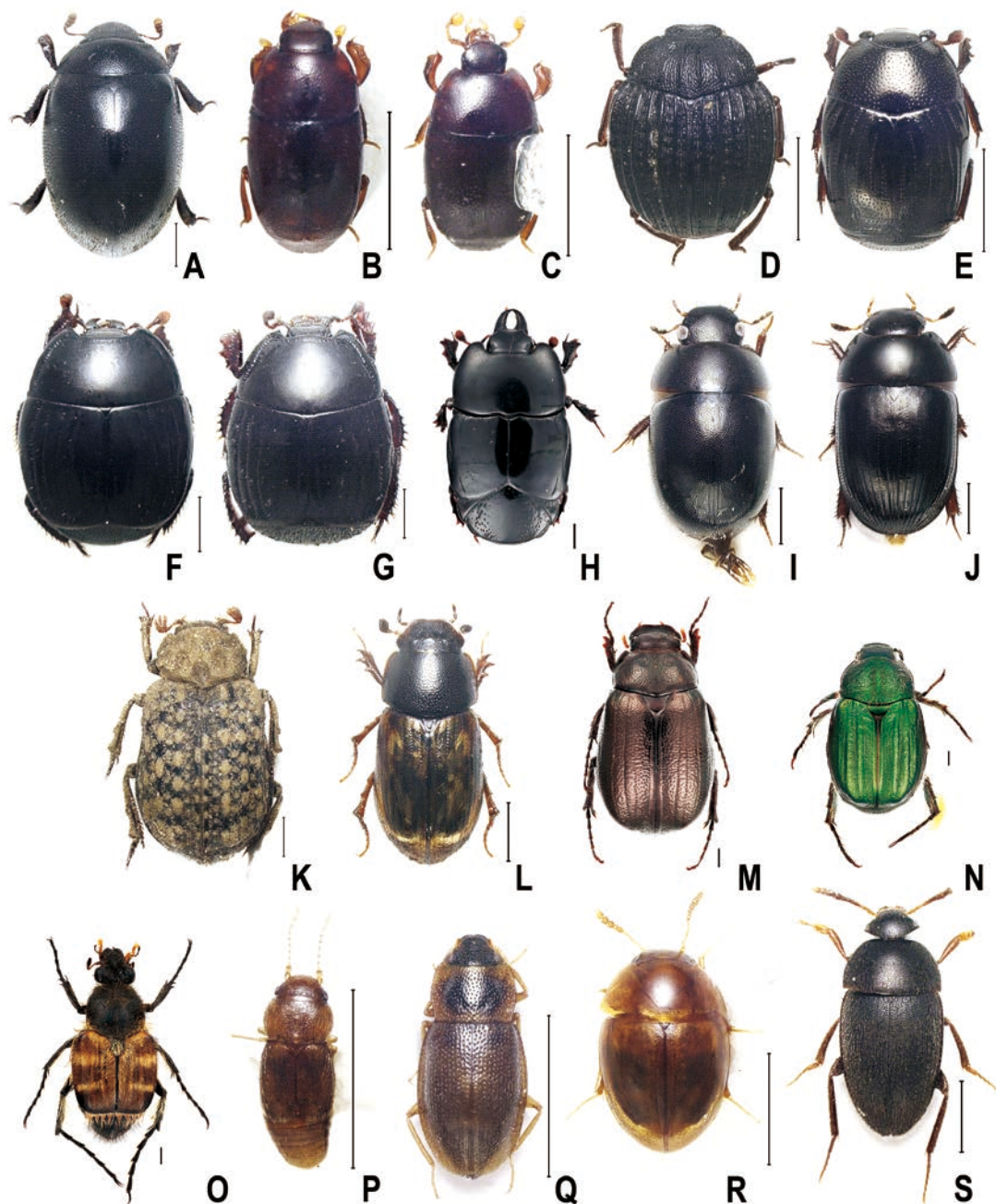


図4. 皇居から新たに記録される甲虫の標本写真2. A. タイワンヒメトゲムシ; B. アカチビヒラタエンマムシ; C. フジチビヒラタエンマムシ; D. キノコセスジエンマムシ; E. チュウジョウチビエンマムシ; F. ツヤマルエンマムシ; G. ヒメツヤエンマムシ; H. オオヒラタエンマムシ; I. ヒメセマルガムシ; J. コセスジハバピロガムシ; K. ヒメコブスジコガネ; L. セマダラマグソコガネ; M. オオカンショコガネ; N. ヒラタアオコガネ; O. ヒメトラハナムグリ; P. ルイスウスイロムクゲキノコムシ; Q. ミヤタケダルマガムシ; R. セスジクサビラタマキノコムシ; S. カントウコチビシデムシ. スケールはすべて1 mm.

1 ex. KM, 23. i. 2024; 1 ex. Y, 19. iii. 2024; 3 exs. Y, 28. i. 2025.

48. ヒメカンショコガネ *Apogonia amida* Lewis, 1896

吊下式ライトトラップにて採集。都区部の公園等で夜間、灯火に誘引された個体を観察している。本種は夜行性のため皇居でこれまで記録がなかったものと思われる。

<採集データ> 1 ex. Y, 31. v. 2022.

49. オオカンショコガネ *Apogonia major major* Waterhouse, 1875 在来種（国内外来または北上種？）（図4M）

近年、関東地方（千葉県、神奈川県、東京都）の南部沿岸地域から記録されるようになってきており（直海, 1997; 渡, 2004; 池田, 2013）、国内外来種と目されている（酒井ら, 2015）。東京都からは大田区の東京港野鳥公園、江戸川区の葛西臨海公園から記録されている（酒井ら, 2015; 山崎, 2019）。山崎は中道灌漑の斜面林でピーティングにより確認したほか、覆馬場跡、果樹園付近の吊下式ライトトラップで多くの個体を確認している。

<採集データ> 1 ex. UE, 18. v. 2023; 8 exs. Y, 8. vi. 2023; 5 exs. Y, 6. vii. 2023; 4 exs. Y, 10. viii. 2023; 4 exs. KM, 16. v. 2024; 4 exs. KM, 23. v. 2024; 1 ex. UE, 30. v. 2024; 1 ex. Y, 6. vi. 2024.

50. ヒラタアオコガネ *Anomala octiescostata* (Burmeister, 1844) 在来種（国内外来または北上種？）（図4N）

関東地方以西に分布し春から初夏に成虫が出現する。山崎の観察によれば2000年前後から関東地方でもよく見られるようになり、最近になって都区部でも頻繁に観察されるようになった。

<採集データ> 1 ex. Y, 28. iv. 2022; 1 ex. UE, 9. v. 2024.

51. シラホシハナムグリ *Protaetia (Liocola) brevitarsis brevitarsis* (Lewis, 1879) 在来種？（図2C）

皇居からは野村ら（2023）によって、以下の2種とともに記録された。本種は、近年、急速に関東平野部で勢力を増している。在来個体群と由来が同一であるかは明らかにされていない。

<採集データ> 2 exs. N, 9. viii. 2022; 1 ex. KN, 18. viii. 2022; 1 ex. N, 4. x. 2022; 2 exs. KM, 3. viii.

2023; 2 exs. Y, 3. viii. 2023; 1 ex. UE, 17. viii. 2023; 1 ex. UE, 30. v. 2024; 1 ex. Y, 6. vi. 2024; 1 ex. UE, 14. vi. 2024; 1 ex. Y, 14. vii. 2025.

52. リュウキュウツヤハナムグリ奄美大島亜種 *Protaetia (Pyropotosia) pryeri oschimana* (Nonfried, 1895) 国内外来種

大型コガネムシ類調査のベイトトラップより採集され、皇居からは野村ら（2023—前出）によって記録された。環境省が公表している「生態系被害防止外来種リスト」（環境省, 2025）および「東京都外来種対策リスト2025」（東京都環境局, 2025）は、本種を総合対策外来種に指定している。

<採集データ（トラップ調査を除く）> 1 ex. M, 20. vii. 2023.

53. クロカナブン *Rhomborhina (Rhomborhina) polita* Waterhouse, 1875

大型コガネムシ類調査のベイトトラップより採集され、皇居からは野村ら（2023—前出）によって記録された。

54. ヒメトラハナムグリ *Lasiotrichius succinctus* (Pallas, 1781)（図4O）

スウィーピング及び吊下式ライトトラップにて採集。幼虫は朽木、成虫は花上で確認できる。都区部の公園等でも少ないながら観察されている。

<採集データ> 3 exs. N, 26. v. 2022; 1 ex. Y, 9. vi. 2022; 1 ex. Y, 21. vii. 2022.

ムクゲキノコムシ科 Ptiliidae

55. ルイスウスイロムクゲキノコムシ *Ptinella lewisiana* A. Matthews, 1884（図4P）

伐採木の樹皮下のやや湿った環境に大量にみられた。東京都からは奥多摩地域のほか（野村・藤倉, 2011）、区部からは明治神宮から記録されている（岡田ら, 2013）。

<採集データ> 1 ex. N, 15. xi. 2021; 4 exs. N, 25. i. 2022; 44 exs. KM, 21. xi. 2023.

ダルマガムシ科 Hydraenidae

56. ミヤタケダルマガムシ *Hydraena (Hydraenopsis) miyatakei* M. Satô, 1959（図4Q）

東京都初記録。観瀑亭付近の細流にほど近い直径1mほどの小さな窪地に溜まった落葉堆積下か

ら、ホソセスジゲンゴロウなどとともに確認された。雨が降ると水が溜まる場所であるが、11~12月はほとんど水がなかった。やや富栄養な止水域に生息し、河川のように見られることがある(中島ら, 2020)。珍しい種ではないが、微小なため発見されにくい。

<採集データ> 1 ex. KM, 21. xi. 2023.

タマキノコムシ科 Leiodidae

57. セスジクサビラタマキノコムシ *Pseudocolenis hilleri* Reitter, 1885 (図4R)

枯れ木積みより採集した。同定にはHoshina (2020) および保科 (2021) を参照した。都区部では岡田ら (2013) が明治神宮から本種のシノニムとなったチャイロヒメタマキノコムシ *Colenis strigosus* Portevin, 1905 として記録している。

<採集データ> 3 exs. UE, 15. x. 2021; 1 ex. UE, 28. x. 2021; 1 ex. UE, 18. xi. 2021; 5 exs. UE, 19. v. 2022; 1 ex. UE, 26. v. 2022; 1 ex. UE, 9. vi. 2022; 4 exs. UE, 28. vii. 2022; 1 ex. UE, 9. viii. 2022; 1 ex. UE, 25. viii. 2022; 1 ex. UE, 27. iv. 2023; 1 ex. KM, 6. vii. 2023; 1 ex. UE, 6. vii. 2023; 3 exs. UE, 3. x. 2023; 6 exs. KM, 20. vi. 2024; 1 ex. UE, 28. i. 2025.

58. カントウコチビシデムシ *Sciodrepoides pluvialis* Nishikawa, 1992 (図4S)

埼玉県北本市市戸宿をタイプロカリティとするチビシデムシで、関東平野からのみ知られる。大田区の大井埠頭、自然教育園からも記録されている(Nishikawa, 1992; 野村ら, 2019)。皇居ではタヌキの溜め糞場のシフティングにより確認された。過去に皇居から確認されている「*Sciodrepoides* sp.」(野村ら, 2000, 2006) も本種の可能性がある。

<採集データ> 1 ex. KM, 19. iii. 2024.

ハネカクシ科 Staphylinidae

59. タカハシセスジハネカクシ *Oxytelus (Tanycraerus) lucidulus* Cameron, 1929 (図5A)

タヌキの溜め糞場のシフティングにより確認された。稲城市のほか区部からは自然教育園から見つかっている(伊藤, 2015a; 野村ら, 2019)。

<採集データ> 1 ex. KM, 21. xi. 2023.

60. アロウハネナガヨツメハネカクシ *Olophrum arrowi* Scheerpeltz, 1929 (図5B)

山崎はタヌキのため糞から採集した5個体のア

ロウハネナガヨツメハネカクシと思われる個体の後翅を確認したところ2個体で後翅が確認できた。皇居からの記録は無かったが野村・平野 (2005) の赤坂御用地ならびに常盤松御用邸の甲虫相では記録されている。

<採集データ> 1 ex. Y, 4. iv. 2024; 1 ex. Y, 13. iii. 2025.

61. キバネツヤヨツメハネカクシ *Orochares debilis* (Sharp, 1889) (図5C)

東京都では12月に世田谷区から採集されている(Watanabe, 1990)。最近、本種の生態に関する報文が報告されている(Senda & Obae, 2022)。平地ではもっぱら冬季(12~2月)に採集されているが、山地では7月に採集されることもある。覆馬場跡ならびに果樹園付近のタヌキのため糞から12月~2月の間に多くの個体が確認されている。

<採集データ> 2 exs. KM, 16. xii. 2021; 3 exs. Y, 25. i. 2022; 5 exs. Y, 24. ii. 2022; 1 ex. KM, 8. xii. 2022; 4 exs. KM, 19. i. 2023; 1 ex. UE, 26. i. 2023; 7 exs. KM, 19. xii. 2023; 14 exs. Y, 26. xii. 2023; 2 exs. UE, 26. xii. 2023; 12 exs. Y, 9. i. 2024; 1 ex. N, 26. xii. 2024; 12 exs. Y, 28. i. 2025.

62. ムネボソヨツメハネカクシ *Boreaphilus japonicus* Sharp, 1874 (図5D)

東京都からは奥多摩の古里付近、町田市小野路などから得られている(Watanabe, 1990; 吉田, 1999)。皇居では果樹園付近の樹林内のリターのシフティングで確認された。

<採集データ> 1 ex. KM, 24. xi. 2022.

63. シリプトヨツメハネカクシ *Eudectus rufulus* Weise, 1877 (図5E)

東京都からは板橋区のほか奥多摩地域などからも確認されている(緑生研究所・板橋区役所土木部公園緑地課編, 1986; Watanabe, 1990)。下道灌堀の水際のリターのシフティングで多くの個体が確認された。

<採集データ> 1 ex. UE, 5. iv. 2022; 10 exs. KM, 7. iii. 2023; 4 exs. KM, 7. iii. 2023; 1 ex. UE, 28. xi. 2023; 1 ex. UE, 21. xi. 2024; 1 ex. Y, 25. ii. 2025.

64. コクロヒゲプトハネカクシ *Aleochara (Aleochara) parens* Sharp, 1874

都区部からは、各所から記録されており、赤坂

御用地, 常盤松御用邸, 自然教育園からも得られている (野村・平野, 2005; 野村ら, 2019). 吹上御苑の細流に接したリターのシフティングによって得られた.

<採集データ> 1 ex. KM, 9. iii. 2023.

65. ヒメショウジョウハネカクシ *Thamiaraea japonica* Cameron, 1933 (図5F)

クヌギの樹液から採集された. 区部からは渋谷区恵比寿から港区白金にまたがって位置する慶應義塾幼稚舎で記録されている (須黒ら, 2022).

<採集データ> 3 exs. KM, 13. vii. 2023.

66. メダカハネカクシの一種 (和名なし) *Stenus oliverbetzi* Naomi, Nomura et Puthz, 2017 (図5G)

東京都初記録. 中道灌漑の湿地で採集された. 記載年が新しいため分布の詳細は不明だが, 関東平野の河川敷, 池周辺, 湿地から見ついている (Naomi *et al.*, 2017).

<採集データ> 4 exs. KM, 13. vii. 2023; 1 ex. KM, 3. viii. 2023.

67. ニセメダカハネカクシ *Stenaesthetus sunioides* Sharp, 1874 (図5H)

東京都本土部では稲城市からの記録 (伊藤, 2016) があるが, 上田の観察によれば, 区部市街地内においても少なくない.

<採集データ> 1 ex. UE, 24. ii. 2022; 1 ex. KM, 31. x. 2024.

68. オオシグロハネカクシ *Astenus (Astenus) suffusus* (Sharp, 1874) (図5I)

上道灌漑, 吹上御苑の観瀑亭前の草地環境においてシフティングで確認された.

<採集データ> 1 ex. KM, 2 exs. UE, 24. x. 2024; 1 ex. KM, 21. i. 2025.

69. ルイスクビブトハネカクシ *Phinopilus lewisius* (Sharp, 1874)

覆馬場跡において森林リター層のシフティングで確認された.

<採集データ> 2 exs. KM, 26. iii. 2025.

70. アラハダドウナガハネカクシ *Palaminus japonicus* Cameron, 1930

採集状況は詳らかでない. 東京都初記録種である.

<採集データ> 1 ex. UE, 10. viii. 2023.

71. ナミクシヒゲツヤムネハネカクシ *Quedioides (Velleius) dilatatus* (Fabricius, 1787) (図5J)

大型コガネムシ類調査のためのバナナトラップで1頭のみ回収された. 本種の都内の記録は稲城市 (2例) と奥多摩三頭山だけで23区内の記録はないようである.

<採集データ> 1 ex. N, 9. viii. 2023; 1 ex. N, 29. ix. 2022.

カツオブシムシ科 Dermestidae

72. チビケカツオブシムシ *Trinodes rufescens* Reitter, 1877 (図5K)

吹上御苑の観瀑亭外壁についたヒラタグモの巣周辺により採集された. 特殊な微環境から見つかるため記録は多くはないが, 都区内からも板橋区, 大田区からも見つかっており (緑生研究所・板橋区役所土木部公園緑地課編, 1986; 大田区, 1997), 山地の高尾山地域などからも記録されている (Ohbayashi, 1977).

<採集データ> 14 exs. KM, 23. v. 2024.

73. カマキリタマゴカツオブシムシ *Thaumaglossa rufocapillata* Redtenbacher, 1867 (図5L)

灌木などのビーティングやスウィーピングにより採集した. 都区部では板橋区, 大田区から記録がある (東京都板橋区, 1991; 大田区, 1997).

<採集データ> 1 ex. UE, 9. vi. 2022; 1 ex. UE, 29. ix. 2022; 1 ex. UE, 8. vi. 2023; 1 ex. KM, 9. v. 2024; 2 exs. KM, 16. v. 2024.

74. マダラカツオブシムシ属の一種 *Trogoderma* sp. (図5M)

幼虫が乾燥した動物 (死骸や標本) や羽毛などを食するものが多く室内で観察されることも多い. 覆馬場跡に設置した吊下式ライトトラップで採集したが種の特定には至っていない. ここでは在来種として扱ったが, 国立環境研究所が公開している侵入生物データベース・日本の外来種全種リストの暫定甲虫リスト (侵入生物データベース, 2025) によると, マダラカツオブシムシ属 *Trogoderma* の一部は外来種とされていることから, 種によっては外来種である可能性もある.

<採集データ> 1 ex. Y, 31. v. 2022.

ヒョウホンムシ科 Ptinidae

75. ササジツツガタシバンムシ *Gastrallus sasajii* Sakai, 2007 (図5N)

灌木などのピーティングにより採集し, Sakai (2007) および中村 (2021) を参照して同定した. 本種は, 従来フルホンシバンムシ *Gastrallus immarginatus* (Müller, 1821) とされてきたものが真の *G. immarginatus* とは異なるとして, Sakai (2007) により新種として記載されたものである. 皇居からのこれまでのフルホンシバンムシ *G. immarginatus* の記録は再検討する必要があると思われる.

<採集データ> 1 ex. UE, 30. v. 2024; 3 exs. UE, 6. vi. 2024.

76. クロトサカシバンムシ *Trichodesma (Trichodesma) japonica* Pic, 1906 (図5O)

成虫は広葉樹の枯れ枝で見られ, 幼虫は枯れ枝を食す. 都内での観察例は少ないようである. 果樹園付近の枯れ木の積まれた近くに設置した吊下式ライトトラップで確認した.

<採集データ> 1 ex. Y, 8. vi. 2023.

77. タイワンタマキノコシバンムシ *Byrrhodes tomokunii* Sakai, 1996 外来種? (図5P)

覆馬場跡で採集したサルノコシカケ類のキノコから多数発生した. 本種は台湾においてサルノコシカケ類から羽化脱出した個体を基に記載されたもので, 日本では2014年に東京都稲城市で初めて採集され, 外来種の可能性が示唆されている (伊藤, 2015b). 上田の観察によれば, 本種は近年都区部において急増しており, 外来種による移入の典型的なパターンを示しつつある.

<採集データ> 3 exs. UE, 18. xi. 2021 (キノコ採取), 30. i. 2022 (回収); 1 ex. UE, 18. viii. 2022; 1 ex. UE, 29. ix. 2022.

カッコウムシ科 Cleridae

78. ツマグロツツカッコウムシ *Tenerus hilleri* Harold, 1877 (図5Q)

幼虫が枯れ木内で他の虫の幼虫を食するため成虫も枯れ木周辺で確認されることが多い. 光に飛来することもある.

<採集データ> 1 ex. M, 13. vii. 2023; 1 ex. Y, 10. viii. 2023; 1 ex. Y, 14. vii. 2025.

79. ヤマトヒメメダカカッコウムシ *Neohydnius hozumii* Nakane, 1981 (図5R)

水辺のヨシ原などに生息し, 成虫は6月頃に見られる. 中道灌漑のヨシ原のスウィーピングで確認された. 本種は東京都本土部では荒川および多摩川の河川敷のほか, 東京港野鳥公園からも記録されている (酒井, 2004; 酒井ら, 2015).

<採集データ> 1 ex. UE, 23. v. 2024; 3 exs. UE, 30. v. 2024; 1 ex. Y, 6. vi. 2024; 2 exs. UE, 6. vi. 2024; 2 exs. UE, 14. vi. 2024; 2 exs. Y, 20. vi. 2024.

ハナノミ科 Mordellidae

80. アヤオビハナノミ *Glipa (Macroglipta) ohgushii* (Chûjô, 1957) 在来種 (国内外来または北上種?) (図2D)

東京都初記録. 成虫は6月中旬から10月初旬まで確認された. コナラ, クヌギ, エノキなど各種広葉樹の伐採木上や周囲の草本, 低木の葉上に頻繁に飛来した. 吊下式ライトトラップでも採集した. 比較的最近まで東限記録は山梨県下部町付近だったが (高桑, 2000), 近年, 埼玉県からも記録されている (林, 2024). 東進北上種の可能性がある. 皇居からは2021年に発見され, 2022年も発生数が多かった.

<採集データ> 3 exs. UE, 15. vii. 2021; 1 ex. Y, 16. vi. 2022; 4 exs. N, 30. vi. 2022; 19 exs. KM, 12 exs. N, 5. vii. 2022; 4 exs. UE, 9 exs. Y, 21. vii. 2022; 1 ex. UE, 28. vii. 2022; 1 ex. UE, 9. viii. 2022; 5 exs. Y, 18. viii. 2022; 4 exs. Y, 25. viii. 2022; 1 ex. UE, 1. ix. 2022; 1 ex. Y, 4. x. 2022; 1 ex. UE, 29. vi. 2023; 5 exs. Y, 1 ex. UE, 6. vii. 2023; 1 ex. KM, 31. viii. 2023; 1 ex. KM, 14. vi. 2024; 1 ex. Y, 10. vii. 2025.

81. クリイロヒゲハナノミ *Macrotomoxia castanea* Pic, 1922

暖地系の大型のハナノミで関東付近が北限と考えられている. 光に誘引された個体が確認されることが多く, 夜行性と考えられており, 本調査でも吊下式ライトトラップで確認されている.

<採集データ> 1 ex. Y, 10. viii. 2023.

カミキリモドキ科 Oedemeridae

82. キバネカミキリモドキ *Nacerdes (Xanthochroa) luteipennis* (Marseul, 1877)

常緑広葉樹のピーティングで採集した. 東京都区部では明治神宮 (岡田ら, 2013) や板橋区, 大

田区などで記録されている。

<採集データ> 1 ex. Y, 9. vi. 2022.

ツツキノコムシ科 Ciidae

83. エゾツツキノコムシ *Cis jezoensis* Nobuchi, 1960 (図5S)

枯れ木積みより採集された。本種は東京都本土部では稲城市から記録がある(伊藤, 2015a)。

<採集データ> 2 exs. UE, 21. iv. 2022; 1 ex. KM, 11. iv. 2024.

84. チュウジョウエグリツツキノコムシ *Ennearthron chujoi* Nakane et Nobuchi, 1955 (図5T)

枯れ木積みより採集された。本種は都区部では明治神宮と東京港野鳥公園から記録されている(岡田ら, 2013; 酒井ら, 2015)。上田の観察によれば, 本種は都区部市街地において少なくない。

<採集データ> 1 ex. UE, 29. viii. 2024.

85. キムネツツキノコムシ *Hadraule subrobustus* (Miyatake, 1955) (図5U)

枯れ木積みを生えた種不明のキノコより採集された。本種は都区部では東京港野鳥公園と自然教育園から記録がある(酒井ら, 2015; 野村ら, 2019)。

<採集データ> 1 ex. UE, 27. iv. 2023; 1 ex. UE, 11. v. 2023; 1 ex. UE, 28. i. 2025.

86. スエヒロタケホソツツキノコムシ *Orthocis schizophylli* (Nakane et Nobuchi, 1955) (図5V)

枯れ木積みの中のスエヒロタケが生えた枯れ木のピーティングにより採集された。本種は都区部では港区青山と明治神宮から記録されている(Nakane & Nobuchi, 1955; 岡田ら, 2013)。

<採集データ> 4 exs. UE, 1. vii. 2025; 3 exs. UE, 10. vii. 2025.

87. キクイツツキノコムシ *Xylographus scheerpeltzi* Nobuchi et Wada, 1956 (図5W)

倒木に生えたサルノコシカケ類のキノコの中から採集された。都区部では港区から記録されている(上田, 2017a)。上田の観察によれば, 本種は都区部市街地の街路樹などの乾燥した環境下で生えたサルノコシカケ類にしばしば見られるが, 皇居内のような湿潤な環境では少ないようである。

<採集データ> 3 exs. UE, 18. xi. 2021.

88. サトツヤツツキノコムシ *Octotemnus assimilis* Kobayashi et Sota, 2019 (図5X)

カワラタケから採集した。次種とともにツヤツツキノコムシ *Octotemnus laminifrons* (Motschulsky, 1860) と混同されていた種で, Kobayashi & Sota (2019) によって記載された。発見自体が新しいため記録は少ないが, 東京都からは稲城市で得られている(伊藤, 2020c)。これまで区部からの確認例はなかったと思われる。和名は次種ともに小林(2020)に従った。

<採集データ> 1 ex. UE, 21. iv. 2022; 1 ex. UE, 7. iii. 2023; 1 ex. UE, 9. iii. 2023; 4 exs. UE, 16. iii. 2023; 9 exs. KM, 23. i. 2024.

89. クジラタケツヤツツキノコムシ *Octotemnus crassus* Kobayashi et Sota, 2019 (図5Y)

クジラタケと思われるキノコより得られた。記載が新しいため東京都からの記録は少ない。都区内(港区, 渋谷区)でも得られている(須黒, 2022)。

<採集データ> 10 exs. KM, 10. iii. 2022; 1 ex. Y, 3. x. 2023; 10 exs. KM, 14. vi. 2024.

ゴミムシダマシ科 Tenebrionidae

90. オオメキバネハムシダマシ *Lagria (Lagria) rufipennis* Marseul, 1876 (図6A)

常緑広葉樹のピーティングで確認した。これまで皇居からの記録は無かったが都区部では少ないものではない。

<採集データ> 1 ex. Y, 16. vi. 2022.

91. ヤマトスナゴミムシダマシ *Gonocephalum (Gonocephalum) coenosum* Kaszab, 1952 在来種(国内外来または北上種?)

本州の分布は従来, 近畿以西とみなされてきたが(秋田・益本, 2016), 近年, 関東地方からも見つかるようになってきており, 関東地方における生息は国内外来種の疑いもある。東京都からは, 品川区から記録されており(上田, 2017b), 上田の観察によれば都区部で近年急増している。下道灌漑の土手に落ちたコンクリート片の下から見つかった。

<採集データ> 1 ex. Y, 6. vi. 2024; 5 exs. KM, 28. xi. 2024; 1 ex. UE, 19. xii. 2024.

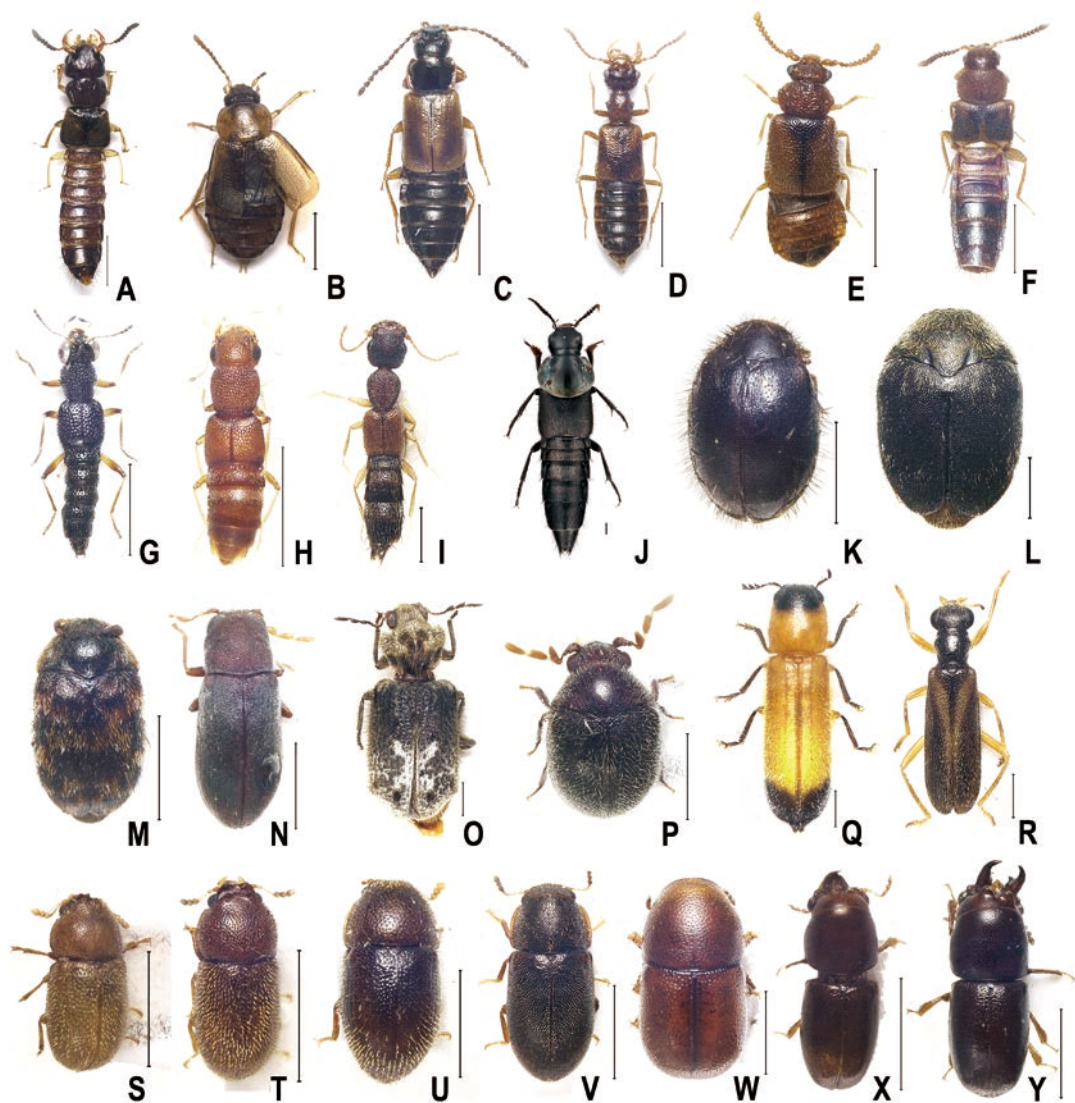


図5. 皇居から新たに記録される甲虫の標本写真3. A. タカハシセスジハネカクシ; B. アロウハネナガヨツメハネカクシ; C. キバネツヤヨツメハネカクシ; D. ムネボソヨツメハネカクシ; E. シリプトヨツメハネカクシ; F. ヒメシヨウジョウハネカクシ; G. *Stenus oliverbetzi* Naomi et al.; H. ニセメダカハネカクシ; I. オオシリグロハネカクシ; J. ナミクシヒゲツヤムネハネカクシ; K. チビケカツオブシムシ; L. カマキリタマゴカツオブシムシ; M. マダラカツオブシムシ属の一種; N. ササジツツガタシバンムシ; O. クロトサカシバンムシ; P. タイワンタマキノコシバンムシ; Q. ツماغロツツカッコウムシ; R. ヤマトヒメメダカカッコウムシ; S. エゾツツキノコムシ; T. チュウジョウウエグリツツキノコムシ; U. キムネツツキノコムシ; V. スエヒロタケホソツツキノコムシ; W. キクイツツキノコムシ; X. サトツツツキノコムシ; Y. クジラタケツツツキノコムシ. スケールはすべて1 mm.

92. コスナゴミムシダマシ *Gonocephalum (Gonocephalum) coriaceum* Motschulsky, 1858

中道灌濠のアシ原や桔梗門近くの石片の下から採集された。都区部においても普通に見られる。
 <採集データ> 1 ex. UE, 21. ix. 2022; 1 ex. UE, 28. xi. 2023; 1 ex. Y, 6. vi. 2024; 1 ex. UE, 24. x. 2024; 1 ex. KM, 28. xi. 2024.

93. クロツヤキマワリ *Plesiophthalmus (Plesiophthalmus) spectabilis* Harold, 1875

吊下式ライトトラップにて採集。夜行性の種であり、夜間、菌類の発生している枯れ木などで見ることができる。特に少ない種ではない。
 <採集データ> 1 ex. Y, 18. viii. 2022.

94. コマルムネゴミムシダマシ *Nalassus (Nalassus) brunnea brunnea* (Marseul, 1876)

覆馬場跡にあった枯れ木積みで越冬していたところを得た。本種は都区部では明治神宮から記録されている(岡田ら, 2013)。
 <採集データ> 1 ex. UE, 4. ii. 2025.

95. クリノウスイロクチキムシ *Borboresthes simiola* (Lewis, 1895)

灌木のビーティングなどにより得た。東京都区部からは、自然教育園から記録されている(野村ら, 2019)。覆馬場跡の枯れ木が積まれた近くに設置した吊下式ライトトラップでも確認している。
 <採集データ> 1 ex. UE, 13. vii. 2023; 1 ex. KM, 23. v. 2024; 1 ex. Y, 6. vi. 2024.

96. ムナビロクチキムシ *Hymenorus veterator* Lewis, 1895 (図6B)

北海道から九州に分布するが産地は限定されており、皇居のような低地での記録は稀なようである。皇居では枯れ枝が積まれた近くに設置した吊下式ライトトラップで確認した。
 <採集データ> 1 ex. Y, 18. v. 2023.

97. クロホシクチキムシ *Pseudocistela haagi* Harold, 1878

カラスウリの絡んだ常緑広葉樹のビーティングで確認した。翌週も同じ場所で複数個体を確認した。幼虫は樹の洞内に生息し成虫は洞の近くで確認されることが多いので、近くに洞のある樹が有

るものと思われるが未確認である。また、果樹園でも小さな洞のある樹で確認した。東京都区部でも洞のあるケヤキなどで少ないながら確認されている(上田, 2011)。

<採集データ> 1 ex. Y, 26. v. 2022; 9 exs. Y, 31. v. 2022; 4 exs. UE, 23. v. 2024; 2 exs. UE, 30. v. 2024; 1 ex. UE, 6. vi. 2024.

98. ヒメナガニジゴミムシダマシ *Ceropria induta induta* (Wiedemann, 1819)

皇居では同属のフトナガニジゴミムシダマシ *C. laticollis* Fairmaire, 1903の方が圧倒的に多く見られたが、上田の観察によれば、都区部市街地内ではむしろ本種の方が多い。

<採集データ> 1 ex. UE, 28. vii. 2022; 1 ex. KM, 3. viii. 2024.

99. クロオビキノコゴミムシダマシ *Platydemia pallidicollis* (Lewis, 1894)

サルノコシカケ類から採集される。東京都本土部では稲城市からの記録(伊藤, 2012)がある。上田の観察によれば、東京都区部市街地においては局所的にしか見られない

<採集データ> 11 exs. UE, 12. v. 2022; 4 exs. UE, 19. v. 2022; 2 exs. UE, 19. v. 2022; 4 exs. Y, 9. vi. 2022; 5 exs. Y, 16. vi. 2022; 2 exs. UE, 21. vii. 2022; 1 ex. Y, 18. viii. 2022; 5 exs. Y, 25. viii. 2022; 1 ex. UE, 1. viii. 2024.

テントウムシ科 Coccinellidae

100. アカホシテントウ *Chilocorus rubidus* Hope, 1831

下道灌濠付近で常緑樹のスウィーピングで採集した。ブナ科樹木やウメにつくタマカイガラムシ類を捕食し、市街地でも多数発生することがある。

<採集データ> 1 ex. M, 10. viii. 2023.

101. シコクフタホシヒメテントウ *Nephus (Geminosipho) shikokensis* Kitano, 2008 外来種? (図6H)

若竹をスウィープすることにより得た。都区部では東京港野鳥公園から記録されている(高桑・酒井, 2015)。愛媛県から記載された種であるが、近年の標本しかなく移入種の可能性があるとして指摘されている(Kitano, 2008)。東京付近でも原記載以前の確認が知られておらず、移入種と思われる。

<採集データ> 2 exs. UE, 26. iii. 2025; 1 ex. UE, 1. vii. 2025.

102. カイヒメテントウ *Nephus (Nephus) kaiensis* (H. Kamiya, 1961) (図6I)

果樹園周辺のクヌギの梢のスウィーピングにより得られた。本種は東京都本土部では稲城市から記録されている (伊藤, 2020b)。

<採集データ> 1 ex. UE, 28. xi. 2023; 1 ex. UE, 14. xi. 2024.

103. セスジヒメテントウ *Nephus (Sidis) levallanti* (Mulsant, 1850) (図6J)

草地やアシ原のスウィーピングにより得られた。本種は都区部では板橋区や大田区から記録されている (東京都板橋区, 1991; 大田区, 1997)。山崎は湿地のアシ類以外でも都区部の公園のスキヤオギなどで確認している。

<採集データ> 1 ex. UE, 6. vii. 2023; 1 ex. UE, 25. iv. 2024; 1 ex. UE, 30. v. 2024; 1 ex. Y, 1. viii. 2024; 1 ex. M, 31. x. 2024.

104. ババヒメテントウ *Scymnus (Neopullus) babai* Sasaji, 1971 (図6K)

中道灌漑のアシ原のスウィーピングにより採集された。本種は都区部では板橋区や大田区から記録されている (東京都板橋区, 1991; 大田区, 1997)。個体数は多い。

<採集データ> 4 exs. UE, 1. ix. 2022; 2 exs. UE, 21. ix. 2022; 4 exs. UE, 29. ix. 2022; 2exs. Y, 4. x. 2022; 1ex. Y, 24. xi. 2022; 12 exs. Y, 25. v. 2023; 1 ex. KM, 6. vii. 2023; 1 ex. Y, 31. viii. 2023; 1 ex. Y, 3. x. 2023; 2 exs. Y, 20. vi. 2024; 2 exs. Y, 10. vii. 2025.

105. オニヒメテントウ *Scymnus (Pullus) giganteus* H. Kamiya, 1961 (図6L)

マツ類から採集され、灌木のピーティングによっても得られた。上田の観察によれば、本種は都区部市街地においてけっして少なくない。

<採集データ> 1 ex. UE, 24. iii. 2022; 1 ex. M, 19. v. 2022; 1 ex. M, 9. vi. 2022; 1 ex. UE, 6. iv. 2023; 1 ex. UE, 10. vii. 2025.

106. オオタツマアカヒメテントウ *Scymnus (Pullus) rectus* (Ohta, 1929) (図6M)

各地の草地や林縁のスウィーピング、ピーティ

ングで確認し、ケヤキの樹皮下で越冬中のところも見られた。都区部でも珍しいものではない。東京都本土部では稲城市から2018年に初めて記録された (伊藤, 2018)。

<採集データ> 1 ex. Y, 21. vii. 2022; 1 ex. Y, 25. viii. 2022; 1 ex. Y, 8. vi. 2023; 1 ex. Y, 3. x. 2023; 1 ex. UE, 9. i. 2024; 1 ex. Y, 18. iv. 2024; 1 ex. UE, 19. xii. 2024; 1 ex. UE, 26. iii. 2025.

107. ハダニクロヒメテントウ *Stethorus (Stethorus) pusillus* (Herbst, 1797) (図6N)

樹木のスウィーピングなどで得られ、岸本ら (2013) を参照して同定した。皇居からはこれまでキアシクロヒメテントウ *Stethorus (Stethorus) japonicus* H. Kamiya, 1959 が記録されているが、再確認が必要と思われる。本種が認知されたのはごく最近であるが、その存在は1970年代から知られている。

<採集データ> 1 ex. UE, 9. viii. 2022; 2 exs. UE, 26. i. 2023; 2 exs. UE, 9. ii. 2023; 1 ex. Y, 1. viii. 2024; 1ex. UE, 24. viii. 2023; 1 ex. Y, 26. iii. 2024; 1 ex. Y, 3. x. 2024; 1 ex. UE, 13. iii. 2025.

108. カメノコテントウ *Aiolocaria hexaspilota* (Hope, 1831) (図2E)

常緑広葉樹低木のピーティングや中道灌漑端の草地でのルッキングにより採集。大型のテントウムシで幼虫、成虫ともにハムシ類の幼虫を食べる。山崎は世田谷区内においてヤナギルリハムシの幼虫を餌としているところを観察している。

<採集データ> 1 ex. Y, 9. vi. 2022; 1 ex. N, 9. vi. 2022; 1 ex. UE, 5. iv. 2024.

109. シロジュウシホシテントウ *Calvia quatuordecimguttata* (Linnaeus, 1758)

本種は都区部市街地でも樹林地においてしばしば見られるが、皇居ではこれまで記録がなく、都区部において近年増加している可能性がある。通常は黄褐色の地色に白色紋を持つ基本型が普通だが、今回地色が黒色になる暗色型が得られた。

<採集データ> 1 ex. M, 28. x. 2021; 1 ex. M, 29. iii. 2022; 1 ex. Y, 26. v. 2022; 2 exs. (うち1 ex. 暗色型), M, 26. v. 2022; 1 ex. UE, 9. vi. 2022; 1 ex. UE, 21. ix. 2022; 1 ex. Y, 10. viii. 2023; 1 ex. M, 4. iv. 2024; 1 ex. Y, 4. ii. 2025.; 1 ex. M, 13. iii. 2025.

110. クリサキテントウ *Harmonia yedoensis* (Takizawa, 1917)

観瀑亭の前にあるアカマツのスウィーピングにより採集し、雌雄ともに生殖器を確認して同定した。本種は都区部でこれまで板橋区、大田区、世田谷区、目黒区などからの記録がある（関, 2022）が、皇居からはこれまで1個体が疑問符付きで記録されていた。

<採集データ> 6 exs. UE, 13. iv. 2023; 1 ex. UE, 20. iv. 2023; 1 ex. UE, 23. v. 2024.

111. ダンダラテントウ *Menochilus sexmaculata* (Fabricius, 1781) (図6C)

都区部では草地や林縁部等で普通に見ることができるが、開放域の少ない吹上御苑内の調査地では少ない。

<採集データ> 1 ex. Y, 26. x. 2021.

112. ムツキボシテントウ *Oenopia scalaris* (Timberlake, 1943) (図6D)

アカマツのスウィーピングにより採集される。本種は都区部では大田区（東京港野鳥公園を含む）からの記録（大田区, 1997; 高桑ら, 2018）があるが、上田の観察によれば、本種は都区部市街地においてけっして珍しくない。

<採集データ> 1 ex. Y, 26. x. 2021; 1 ex. UE, 21. iv. 2022; 1 ex. M, 19. v. 2022.

113. ムネアカオオクロテントウ *Synona consanguinea* Poorani, Ślipiński et Booth, 2008 外来種

本来の分布は中国、台湾、ベトナム、ミャンマー、タイであるが、日本では2014年に東京都大田区で、次いで2015年に大阪府で発見された。現在も関東地方および近畿地方で分布を拡大中である。

<採集データ> 1 ex. KN and N, 5. x. 2021; 1 ex. M, 14. vi. 2024.

114. フクダシロホシテントウ *Vibidia fukudai* Kitano, 2019 (図6E)

従来シロホシテントウ *Vibidia duodecimguttata* (Poda, 1761) とされていた日本産種が2種の未記載種から成ることがわかり、本種とサイトウシロホシテントウ *V. saitoi* Kitano, 2019 が記載された。真の日本産シロホシテントウは標本も見つかっておらず、Kitano(2019)以降、日本からの報告もない。

今般の調査で雄交尾器を検したところ、本種と同定された。過年度調査ではシロホシテントウ属は確認されていないが、都区部では少ないものではなく、特に最近ではよく見かけるようになったことから、近年個体数が増えている可能性がある。なお、和名は阪本(2021)に拠った。

<採集データ> 1 ex. Y, 26. v. 2022; 1 ex. UE, 14. xi. 2023; 1 ex. UE, 5. xii. 2024; 1 ex. KM, 26. xii. 2024; 1 ex. Y, 13. iii. 2025.

115. ニジウヤホシテントウ *Henosepilachna vigintioctopunctata* (Fabricius, 1775)

ジャガイモ等のナス科作物の害虫として知られているが、皇居では同じくナス科のイヌホオズキの一種から採集された。

<採集データ> 1 ex. M, 29. ix. 2022; 4 exs. M, 29. vi. 2023; 1 ex. Y, 6. vii. 2023; 8 exs. M, 13. vii. 2023; 1 ex. M, 20. vii. 2023; 1 ex. UE, 1. viii. 2024; 1 ex. Y, 12. ix. 2024; 1 ex. UE, 24. x. 2024.

116. ムネハラアカクロテントウ *Rhyzobius lophanthae* (Blaisdell, 1892) 外来種

オーストラリア原産でカイガラムシ生物的防除の目的でカリフォルニアに1892年に移入され、北米南部に広く定着している。国内では1994年に兵庫県で初めて発見された（佐々治, 2001）。その後、各地から報告が相次ぎ、東京都からは岡田ら(2013)によって記録されるに至った。

<採集データ> 1 ex. M, 1 ex. Y, 9. vi. 2022; 2 exs. M, 21. vii. 2022; 1 ex. Y, 18. v. 2023; 1 ex. Y, 6. vi. 2024.

117. ベダリアテントウ *Novius cardinalis* (Mulsant, 1850) 外来種 (図6F)

オーストラリア原産。日本へはカンキツ類の害虫であるイセリアカイガラムシの天敵として導入された。皇居では果樹園のミカンから採集された。

<採集データ> 1 ex. M, 4. x. 2022; 1 ex. UE, 7. iii. 2023; 1 ex. Y, 6. vi. 2024; 1 ex. M, 20. vi. 2025.

118. ベニヘリテントウ *Novius limbatu*s (Motschulsky, 1866)

林縁のスウィーピングで採集した。ワラジカイガラムシ類を捕食する。

<採集データ> 1 ex. M, 11. vii. 2024.

119. モンクチビルテントウ *Platynaspis maculosa*
Weise, 1910 外来種 (図6G)

中国, 台湾, ベトナムなどから知られていた種だが, 日本では1990年代に沖縄県から記録され, その後九州から本州に分布を拡大している. 皇居では広葉樹やツル植物のピーティングで確認した. 上田の観察によれば, 東京都区部市街地において近年急増し, 今や多数見られる.

<採集データ> 1 ex. UE, 5. x. 2021; 1 ex. UE, 15. x. 2021; 1 ex. Y, 28. x. 2021; 1 ex. Y, 25. xi. 2021; 2 exs. Y, 21. iv. 2022; 1 ex. Y, 4. x. 2022; 1 ex. N, 28. x. 2022; 1 ex. Y, 6. iv. 2023; 1 ex. KM, 18. iv. 2024; 1 ex. Y, 1. viii. 2024; 1 ex. Y, 3. x. 2024.

120. シセンクロテントウ *Telsimia sichuanensis* Pang
et Mao, 1979 外来種? (図6O)

中道灌漑のシダレヤナギの新芽のスウィーピングにより得た. 同定は交尾器を伊藤ら (2018) の画像と照合して行った. 本種は中国四川省から記載され, 日本国内では東京都稲城市から2018年に初めて記録された. これまでのところ採集記録は東京都, 京都府, 大阪府, 鹿児島県 (奄美大島) に限られている (伊藤ら, 2018; 青井ら, 2024). 本種は外来種である可能性がある一方, 日本にもともと分布していた可能性も必ずしも否定できない.

<採集データ> 1 ex. UE, 16. iii. 2023.

オオキノコムシ科 Erotylidae

121. ケシコメツキモドキ *Microlanguria jansoni*
jansoni (Crotch, 1873) (図6P)

灌木のピーティングにより採集された. 本種は里山環境などで普通に見られるが, これまで都区部からの記録はない.

<採集データ> 1 ex. UE, 5. x. 2021.

122. ルリオオキノコ *Aulacochilus (Aulacochilus)*
sibiricus bedeli Harold, 1880 (図2F)

キノコの生えた伐採木等で普通に観察できた. また, 吊下式ライトトラップでも採集した. 上田の観察によれば, 本種は都区部においてナラ枯れを契機に急増した. 平野部から山地にかけて各地に多い.

<採集データ> 2 exs. UE, 15. x. 2021; 2 exs. UE, 28. x. 2021; 4 exs. N, 15. xi. 2021; 1 ex. N, 25. xi. 2021; 3 exs. Y, 5. iv. 2022; 2 exs. UE, 19. v. 2022; 2

exs. Y, 31. v. 2022; 3 exs. Y, 9. vi. 2022; 1 ex. Y, 16. vi. 2022; 5 exs. KM, 24 exs. N, 5. vii. 2022; 2 exs. Y, 21. vii. 2022; 1 ex. UE, 28. vii. 2022; 2 exs. UE, 9. viii. 2022; 1 ex. Y, 1. ix. 2022; 1 ex. UE, 29. ix. 2022; 2 exs. Y, 4. x. 2022; 2 exs. N, 18. xi. 2022; 1 ex. Y, 18. v. 2023; 1 ex. Y, 13. viii. 2023; 1 ex. Y, 7. ix. 2024; 1 ex. Y, 31. x. 2023; 1 ex. Y, 1. viii. 2024; 1 ex. Y, 20. vi. 2025.

ヒメキノコムシ科 Sphindidae

123. マルヒメキノコムシの一種 (平野 (2015) で
「ウエノマルヒメキノコムシ」とされた種)
Aspidiphorus sp. (図6Q)

枯れ木積みに生えた粘菌類から採集された. 同定は, 平野 (2015) に拠った. 皇居からはこれまでマルヒメキノコムシ *Aspidiphorus japonicus* (Reitter, 1879) が記録されているが, 再確認が必要と思われる.

<採集データ> 3 exs. UE, 26. v. 2022.

ネスイムシ科 Monotomidae

124. カドコブデオネスイ *Monotoma brevicollis*
brevicollis Aubé, 1837 (図6R)

枯れ草のシフティングにより得られた. 同定は平野 (2009) に拠った. 都区部では明治神宮などから記録されている (岡田ら, 2013).

<採集データ> 1 ex. UE, 5. ix. 2024; 1 ex. UE, 12. ix. 2024.

ケシキスイ科 Nitidulidae

125. キボシコオニケシキスイ *Cryptarcha maculata*
Reitter, 1873 在来種 (国内外来または北上種?) (図6S)

駐春閣跡のクヌギ樹液より確認した. 本種は従来は稀種とされ, 東日本からの記録がなかったが, 2020年に都区部で発見されて (上田, 2020) 以来, 都区部とその周辺地域で急増している. このため, この個体群は移入由来である可能性も否定できないと思われる.

<採集データ> 3 exs. KM, 13. vii. 2023; 1 ex. UE, 10. viii. 2023; 1 ex. UE, 17. viii. 2023; 1 ex. UE, 24. viii. 2023; 1 ex. Y, 1. viii. 2024.

126. コヨツボシケシキスイ *Glischrochilus (Librodor)*
ipsoides (Reitter, 1879)

駐春閣跡付近や果樹園付近のクヌギの樹液

より採集した。フルーツトラップやFITで得られるほか、ヨツボシケシキスイ *G. (L.) japonicus* (Motschulsky, 1858) と一緒にコナラ属の樹液上で観察されることもある。区部では明治神宮から記録されている。

<採集データ> 1 ex. UC, 21. vii. 2022; 1 ex. KM, 13. vii. 2023.

127. マメチビケシキスイ *Fabogethes nigrescens* (Stephens, 1830) 外来種? (図6T)

草むらのスウィーピングで得られた。本種を愛媛県から日本で初めて記録した Hisamatsu (2019b) は、本種は最近になって日本に移入された可能性を指摘しており、東京都からは2019年に初めて採集されている (伊藤, 2020a)。上田の観察によれば、大田区や世田谷区の高摩川河川敷では、春先に夥しい数の本種個体が見られる。

<採集データ> 3 exs. UE, 26. iii. 2025.

128. アカチビケシキスイ *Meligethinus tschungseni* Kirejtshuk, 1987 外来種? (図2G, 6U)

日本から初めて記録されたのは広島県下からで、2018年に採集された標本にもとづく (Hisamatsu, 2019a)。その後各地からの報告が相次ぎ、外来由来の可能性が強く疑われる。東京都からも初めて伊藤 (2019) が稲城市から記録したが、採集年は広島県からの日本初記録と同じ2018年であった。上田の観察によれば、都区部においてここ数年急増している。訪花性の強い種で、皇居では果樹園のサクラ類、道灌濠中道沿いのシユロの花で多数の個体が確認された。

<採集データ> 22 exs. KM, 5. iv. 2022; 13 exs. UE, 21. iv. 2022; 32 exs. N, 道灌濠中道, 21. iv. 2022; 12 exs. Y, 28. iv. 2022; 1 ex. UE, 30. v. 2024.

129. ツヤマルケシキスイ *Neopallodes vicinus* Grouvelle, 1892 (図6V)

枯れ木積みより採集された。本種は都区部では大田区と明治神宮から記録がある (大田区, 1997; 岡田ら, 2013)。

<採集データ> 1 ex. UE, 21. vii. 2022.

130. ヒメアカマダラケシキスイ *Lasiodites sadanarii* S-T. Hisamatsu, 2005 (図6W)

吹上御苑の樹林内のリター層のシフティングで採集された。同定は Hisamatsu (2005) に拠った。

皇居からこれまで *Lasiodites* sp. の記録があるが、本種の可能性がある。

<採集データ> 1 ex. UE, 10. iii. 2022; 1 ex. KM, 16. ix. 2023; 1 ex. KM, 31. x. 2024; 1 ex. UE, 4. ii. 2024; 1 ex. KM, 27. ii. 2025.

キスイムシ科 Cryptophagidae

131. クロノコムネキスイ *Henoticus sinensis* Bruce, 1943 (図6X)

皇居では灌木のビーティングで採集された。東京都本土部からは、大田区、世田谷区から記録されている。平地から丘陵地、低山地にみられる種で、多くはないが珍しい種ではない。

<採集データ> 1 ex. Y, 26. v. 2022; 1 ex. KM, 9. v. 2024; 1 ex. UE, 23. v. 2024; 1 ex. Y, 20. vi. 2024; 1 ex. Y, 11. vii. 2024; 1 ex. Y, 1. viii. 2024.

132. ウスモンガマキスイ *Telmatophilus sparganii* (Ahrens, 1812) (図6Y)

東京都初記録。中道灌濠のアシ原のスウィーピングにより得られた。また、同じ濠のミクリの花穂に多数の個体が集まるところが観察された。これまで北海道 (網走湖畔) (平野, 2010) と長野県 (諏訪湖畔) (大山・矢崎, 2018) からのみ記録があり、関東地方からも初記録である。

<採集データ> 1 ex. UE, 21. x. 2022; 4 exs. UE, 20. iv. 2023; 8 exs. UE, 27. iv. 2023; 25 exs. UE, 6. vii. 2023; 3 exs. UE, 10. viii. 2023; 1 ex. UE, 17. viii. 2023; 3 exs. UE, 24. viii. 2023; 3 exs. UE, 31. viii. 2023; 1 ex. UE, 14. ix. 2023; 1 ex. UE, 28. ix. 2023; 3 exs. UE, 18. iv. 2024.

ホソヒラタムシ科 Silvanidae

133. ホソミツカドホソヒラタムシ *Silvanoprus grouvellei* (Reitter, 1876) (図6Z)

枯れ枝のビーティングや枯れ草のシフティングで確認したほか、枯れ木が積まれた近くに設置した吊下式ライトトラップでも確認した。同定は平野 (2010) を用いたが、ブナホソヒラタムシ *Silvanoprus fagi* (Guérin-Méneville, 1844) との判別は個体によっては容易でない。

<採集データ> 12 exs. Y, 26. v. 2022; 1 ex. Y, 31. v. 2022; 1 ex. Y, 6. vi. 2024; 1 ex. UE, 29. viii. 2024; 1 ex. Y, 12. ix. 2024.

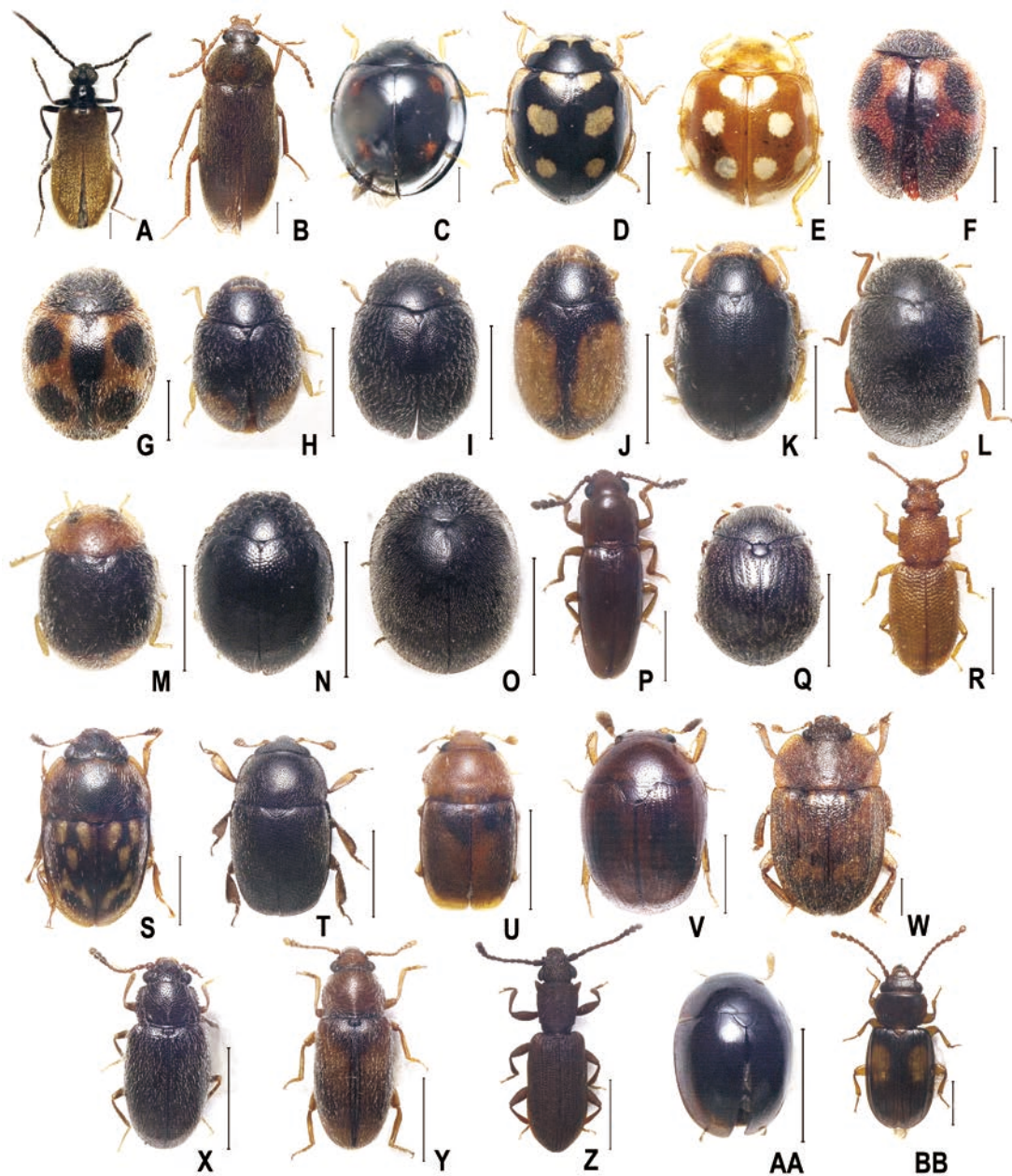


図6. 皇居から新たに記録される甲虫の標本写真4. A. オオメキバネハムシダマシ; B. ムナビロクチキムシ; C. ダンダラテントウ; D. ムツキボシテントウ; E. フクダシロホシテントウ; F. ベダリアテントウ; G. モンクチビルテントウ; H. シコクフタホシヒメテントウ; I. カイヒメテントウ; J. セスジヒメテントウ; K. ババヒメテントウ; L. オニヒメテントウ; M. オオタツマアカヒメテントウ; N. ハダニクロヒメテントウ; O. シセンクロテントウ; P. ケシコメツキモドキ; Q. マルヒメキノコムシの一種; R. カドコブデオネスイ; S. キボシコオニケシキスイ; T. マメチビケシキスイ; U. アカチビケシキスイ; V. ツヤマルケシキスイ; W. ヒメアカマダラケシキスイ; X. クロノコムネキスイ; Y. ウスモンガマキスイ; Z. ホソミツカドホソヒラタムシ; AA. チビズマルヒメハナムシ; BB. キボシチビヒラタムシ. スケールはすべて1 mm.

ヒメハナムシ科 Phalacridae

134. チビズマルヒメハナムシ *Phalacrus luteicornis* Champion, 1924 (図6AA)

ツバキ類のビーティングによって得られた。同定は久松 (1985) に拠った。東京都本土部ではこれまで稲城市からの記録がある (伊藤, 2013)。
 <採集データ> 1 ex. UE, 9. iii. 2023.

チビヒラタムシ科 Laemophloeidae

135. キボシチビヒラタムシ *Laemophloeus submnilis* Reitter, 1889 (図6BB)

枯れ枝のビーティングのほか、枯れ木が積まれた近くに設置した吊下式ライトトラップでも確認した。
 <採集データ> 1 ex. Y, 10. viii. 2023; 1 ex. Y, 14. vii. 2024.

136. グルーベルホソチビヒラタムシ *Leptophloeus convexiusculus* (Grouvelle, 1877)

枯れ木積みの枯れ木のビーティングにより採集された。本種は都区部では明治神宮と自然教育園から記録されている (岡田ら, 2013; 野村ら, 2019)。
 <採集データ> 1 ex. UE, 28. ix. 2023.

137. ウスリーチビヒラタムシ *Notolaemus ussuriensis* Iablokoff-Khnzorian, 1977

枯れ木積みの枯れ木のビーティングにより採集された。本種は都区部では自然教育園から記録されている (野村ら, 2019)。
 <採集データ> 1 ex. UE, 13. vii. 2023.

138. カドムネチビヒラタムシ *Placonotus testaceus* (Fabricius, 1787)

駐春閣跡に置かれた伐採木の樹皮下や枯れ枝叩きで確認した。同定には吉田貴大氏の協力を得た。本種は都区部では板橋区と明治神宮から記録されている (東京都板橋区, 1991; 岡田ら, 2013)。
 <採集データ> 5 exs. UE, 25. xi. 2021; 3 exs. Y, 2. xii. 2021; 4 exs. UE, 24. ii. 2022; 5 exs. UE, 10. iii. 2022; 1 ex. UE, 31. x. 2023; 1 ex. Y, 12. ix. 2024.

ヒゲナガゾウムシ科 Anthribidae

139. カギバラヒゲナガゾウムシ属の一種 *Xanthoderopygus* sp. (図7A)

覆馬場跡の枯れ木が積まれた近くに設置した吊

下式ライトトラップで確認したが種の特定にはいたらなかった。

<採集データ> 1 ex. Y, 6. vi. 2024.

140. イボタロウヒゲナガゾウムシ *Anthribus niveovariegatus* (Roelofs, 1879)

灌木のビーティングによって採集された。イボタロウカイガラムシなどのカイガラムシを捕食する (福田, 1955)。東京都からは大田区、渋谷区 (明治神宮)、世田谷区などから記録されている (大田区, 1997; 岡田ら, 2013; みつ池を育てる会, 2019)。

<採集データ> 1 ex. KM, 16. v. 2024.

オトシブミ科 Attelebidae

141. カシルリオトシブミ *Euops (Parasynaptopsis) splendidus* Voss, 1930 (図7B)

草地のスウィーピングで採集した。草本から樹木に至る多くの植物の葉を食べる。都区部では少ないものではない。

<採集データ> 1 ex. Y, 16. vi. 2022.

142. マルムネチョッキリ *Chonostropheus chujoi* Voss, 1956 (図7C)

果樹園においてトウカエデのひこばえより得られた。一般的には平地から山地にかけての雑木林で春季に見つかる種である。普通種だが、都区部からの記録はなかったものと思われる。

<採集データ> 1 ex. KM, 11. iv. 2024; 1 ex. KM, 18. iv. 2024.

143. グミチョッキリ *Involvulus (Parinvolvulus) placidus* (Sharp, 1889)

グミ類の樹木のビーティングにより採集。本種は都区部では大田区、江戸川区から記録がある (大田区, 1997; 山崎, 2019)。

<採集データ> 1 ex. UE, 12. v. 2022; 1 ex. UE, 19. v. 2022; 1 ex. UE, 6. iv. 2023; 1 ex. UE, 27. iv. 2023; 1 ex. KM, 23. v. 2024.

144. クチプトチョッキリ *Lasiorhynchites (Nelasiorhynchites) brevisrostris* (Roelofs, 1874)

果樹園周辺のクヌギの梢のスウィーピングにより得られた。本種は東京都本土部では稲城市、渋谷区明治神宮 (菅谷, 2021) から記録されている。

<採集データ> 2 exs. UE, 6. iv. 2024.

ゾウムシ科 Curculionidae

145. カシノナガキクイムシ *Platypus quercivorus* (Murayama, 1925) 在来種 (国内外来または北上種?) (図7D)

吊下式ライトトラップにて採集。東京都区部でも2018年ごろからナラ枯れ被害が見られるようになった。亀澤は、クヌギ樹幹の樹液に捕捉されていた個体のうち生きている個体だけを回収した。自然教育園では2018年から(野村ら, 2019)、明治神宮でも2018年から確認されている(伊藤, 2021)。東進北上種の可能性がある。

<採集データ> 1 ex. Y, 31. v. 2022; 1 ex. Y, 9. vi. 2022; 3 exs. Y, 16. vi. 2022; 1 ex. UE, 21. vii. 2022; 1 ex. UE, 9. viii. 2022; 1 ex. Y, 18. viii. 2022; 1 ex. UE, 9. i. 2023; 1 ex. Y, 7. iii. 2023; 1 ex. Y, 8. vi. 2023; 11 exs. KM, 13. vii. 2023; 1 ex. Y, 19. ix. 2024; 1 ex. Y, 20. vi. 2025.

146. シロスジタコゾウムシ *Hypera (Eiriniomorphus) conmaculata* (Herbst, 1795)

道灌濠端の草むらのスウィーピングにより採集された。本種は東京都本土部では稲城市(伊藤, 2012)および八王子市からの記録(松原・雛倉, 2016)がある。

<採集データ> 1 ex. UE, 21. iv. 2022.

147. コクロホシクチブトゾウムシ *Lepidepistomodes kokurohoshi* Kojima et Morimoto, 2006

Morimoto *et al.* (2006) によって知られるようになった種である。スダジイのひこばえには同属のケブカクチブトゾウムシ *L. fumosus* (Faust, 1882) が優占していたが、本種はクヌギなどの葉から得られた。雌だけで単為生殖する種で、過年度調査時には未記載種だったためケブカクチブトゾウムシと混同されていた可能性がある。都区部からは明治神宮、東京港野鳥公園から記録されている(岡田ら, 2013; 酒井・高桑, 2015)。

<採集データ> 5 exs. Y, 16. vi. 2022; 1 ex. Y, 8. vi. 2023; 1 ex. UE, 29. vi. 2023; 3 exs. KM, 9. v. 2024; 3 exs. KM, 16. v. 2024; 3 exs. KM, 4 exs. UE, 23. v. 2024; 1 ex. UE, 30. v. 2024; 2 exs. Y, 6. vi. 2024.

148. カキスグリゾウムシ *Pseudocneorhinus obesus* Roelofs, 1873

果樹園の草地から得た。本種は基本的に夜行性的のため、昼間は見つかりにくい。東京都本土部では大田区から記録がある(大田区, 1997)。

<採集データ> 1 ex. UE, 22. viii. 2024; 1 ex. UE, 5. ix. 2024.

149. リシリツチゾウムシ *Trachyphilus rishirianus* Morimoto, 2015

上道灌濠近くの石垣の縁に積もっていたリターから得た。本種の分布は北海道、秋田県、神奈川県と不連続であり(Morimoto *et al.*, 2015)、東京都本土部ではこれまで稲城市から記録されている(伊藤, 2017b)。

<採集データ> 1 ex. UE, 10. x. 2024.

150. ナミツチゾウムシ *Trachyphilus vulgaris* Morimoto, 2015

上道灌濠近くの石垣の縁に積もっていたリターから得た。本種は本州、四国などに広く分布する(Morimoto *et al.*, 2015)。皇居からはこれまで *Trachyphilus* sp. が数個体記録されているが、それらが前種に当たるのか本種に当たるのか、あるいはいずれでもないのか、再検討を要すると思われる。

<採集データ> 1 ex. UE, 24. x. 2024.

151. フトゲチビツチゾウムシ *Trachyphloeosoma roelofsi* Sharp, 1896 (図7E)

覆馬場跡において森林リター層のシフティングによって確認された。都区部では自然教育園から記録されている。皇居からは近似種ホソゲチビツチゾウムシ *T. advena* Zimmerman, 1956も確認されているが、今期調査では完全な同一地点からは見つかっていない。単為生殖しているとみなされている種で、雌しか見つかっていない。

<採集データ> 5 exs. Y, 26. xii. 2024; 1 ex. Y, 28. i. 2025; 5 exs. KM, 27. ii. 2025.

152. マツトビゾウムシ *Pachyrhinus (Pachyrhinus) scutellaris* (Roelofs, 1873)

果樹園のマツのスウィーピングで採集された。

<採集データ> 1 ex. M, 18. iii. 2025.

153. オオクマハナゾウムシ *Anthonomus (Anthonomus) okumai* Morimoto et Miyakawa, 1985 在来種（国内外来または北上種？）（図7F）

東京都本土部初記録。タイプロカリティは伊豆諸島式根島で、パラタイプには三浦半島産が含まれる（Morimoto & Miyakawa, 1985）。各種樹木のビーティングで採集した。調査を開始した2021年から2022にかけては調査エリアの各所で少なくなかったが、2023年以降は確認できていない。北上種の可能性がある。

<採集データ> 1 ex. UE, 5. x. 2021; 2 exs. Y, 26. x. 2021; 1 ex. Y, 11. xi. 2021; 10 exs. UE, 18. xi. 2021; 5 exs. KM, 5 exs. N, 16. xii. 2021; 1 ex. UE, 1 ex. KM, 15. iii. 2022; 6 exs. UE, 24. iii. 2022; 1 ex. UE, 29. iii. 2022; 1 ex. Y, 5. iv. 2022; 1 ex. Y, 26. v. 2022; 1 ex. Y, 21. vii. 2022; 1 ex. UE, 28. vii. 2022; 1 ex. Y, 21. ix. 2022; 1 ex. Y, 24. xi. 2022; 1 ex. KM, 8. xii. 2022.

154. オビモンハナゾウムシ *Anthonomus (Furcispus) rectirostris* (Linnaeus, 1758)

サクラにつく種。東京都本土部では高尾山から古い記録がある以外、記録がないようであるが（Kôno, 1939）、それほど少ない種ではない。春季にはサクラのひこばえのビーティングで得られたほか、冬季にはムクノキ等の樹皮下で越冬個体が確認されている。

<採集データ> 1 ex. KM, 24. ii. 2022; 1 ex. KM, 5. iv. 2022; 1 ex. KM, 16. ii. 2023; 1 ex. UE, 16. iii. 2023; 1 ex. UE, 28. iii. 2023.

155. ツバキシギゾウムシ *Curculio (Curculio) camelliae* (Roelofs, 1874)

ツバキ類のビーティングや吊下式ライトトラップで採集した。東京都では明治神宮と自然教育園の記録がある（岡田ら, 2013; 野村ら, 2019）。

<採集データ> 1 ex. UE, 21. iv. 2022; 1 ex. N, 28. iv. 2022; 1 ex. UE, 12. v. 2022; 1 ex. Y, 26. v. 2022; 1 ex. UE, 9. vi. 2022; 1 ex. Y, 21. vii. 2022; 1 ex. UE, 27. iv. 2023; 1 ex. UE, 18. v. 2023.

156. クヌギシギゾウムシ *Curculio (Curculio) robustus* (Roelofs, 1874)（図7G）

果樹園のクヌギのスウィーピングで採集した。都区部でもクヌギの若い実（ドングリ）が出来たところにスウィーピングすると普通に得ることができる。

<採集データ> 1 ex. UE, 1. ix. 2022; 1 ex. Y, 15. ix. 2022; 1 ex. UE, 29. ix. 2022; 1 ex. KM, 3. viii. 2023; 1 ex. Y, 10. viii. 2023; 1 ex. UE, 31. viii. 2023; 1 ex. Y, 7. ix. 2023.

157. モンイネゾウムシ *Dorytomus (Alycodes) maculipennis* Roelofs, 1874

中道灌漑端のシダレヤナギの大木の枝が折れて垂れ下がった部分を叩くと、数頭得られた。同定には森本・遠田（1962）を参照した。本種は東京都本土部では稲城市からのみ記録されている（伊藤, 2012）が、上田の観察によれば、世田谷区の高摩川河川敷では少なくない。

<採集データ> 6 exs. UE, 25. iv. 2024.

158. ツツノミゾウムシ *Orchestes (Alyctus) cylindricus* (Morimoto, 1984)

樹木のスウィーピングにより採集された。♂交尾器と外形的特徴により同定した。本種は東京都本土部においては稲城市からの記録がある（伊藤・阪本, 2016）。

<採集データ> 1 ex. UE, 24. iii. 2022; 1 ex. UE, 13. vii. 2023.

159. カシワノミゾウムシ *Orchestes (Amurorchestes) koltzei* Faust, 1887（図7H）

コナラやクヌギの葉上で見られることが多い。皇居では果樹園脇の落ち葉ふるいで確認した。

<採集データ> 1 ex. Y, 11. xi. 2021.

160. リンゴノミゾウムシ *Rhamphus pulicarius* (Herbst, 1795)（図7I）

本種のタイプロカリティの1つがTokioであるほか、古い記録がKomabaからあるが（Kôno, 1930）、微小種のせいかなど内からはほとんど記録がない。リンゴやモモ、サクラのほか、シラカバ、クヌギなどもホストとして利用している（Morimoto, 1984）。

<採集データ> 1 ex. KM, 6. vi. 2024.

161. トゲスネヒメゾウムシ *Baris dentipes* Yoshihara, 2016

草むらのスウィーピングにより採集した。同定にはYoshihara（2016）を参照した。本種は東京都本土部においては稲城市（伊藤, 2017a）、板橋区（Yoshihara, 2016）から記録がある。

<採集データ> 1 ex. UE, 28. x. 2021.

162. トゲムネサルゾウムシの一種 (井上・伊澤, 2020で「ミズキトゲムネサルゾウムシ」とされた種) *Coelioderes* sp.

ミズキのスウィーピングにより採集された。「ミズキトゲムネサルゾウムシ」と仮称されている種と同一と思われるが (井上・伊澤, 2020), 伊澤ら (2009) でミズキトゲムネサルゾウムシ *Coelioderes* sp. およびニッポントゲムネサルゾウムシ *Coelioderes nipponicus* (Korotyayev, 2004) とされていた2つの種は井上・伊澤 (2020) で互いに入れ替えられたので, 要注意である。伊藤 (2021) が示した「ミズキトゲムネサルゾウムシ」の♂交尾器と合致していると思なした。過年度調査で皇居から記録されている「トゲムネサルゾウムシの1種 *Mecysmoderes* sp.」は同じ種の可能性がある。
<採集データ> 3 exs. UE, 5. iv. 2022; 3 exs. UE, 26. v. 2022; 1 ex. UE, 9. vi. 2022; 3 exs. UE, 21. vii. 2022; 1 ex. UE, 9. viii. 2022; 3 exs. UE, 18. viii. 2022; 3 exs. UE, 25. viii. 2022; 1 ex. UE, 1. ix. 2022; 1 ex. UE, 7. iii. 2023; 1 ex. UE, 9. iii. 2023; 3 exs. UE, 28. iii. 2023; 3 exs. KM, 25. vii. 2024.

163. タデトゲサルゾウムシ *Homorosoma asperum* (Roelofs, 1875)

イヌタデのスウィーピングにより採集された。都区部からは明治神宮から記録されている (岡田ら, 2013)。
<採集データ> 6 exs. UE, 29. ix. 2022; 1 ex. UE, 11. v. 2023; 1 ex. UE, 31. viii. 2023; 6 exs. KM, 25. iv. 2024.

164. カナムグラトゲサルゾウムシ *Homorosoma chinense* Wagner, 1944

専らイヌタデのスウィーピングにより採集された。東京都本土部では稲城市から記録されている (伊藤, 2012)。
<採集データ> 1 ex. UE, 21. x. 2022; 1 ex. UE, 6. vii. 2023; 1 ex. UE, 31. viii. 2023; 1 ex. UE, 28. ix. 2023; 1 ex. UE, 24. x. 2023; 1 ex. UE, 31. x. 2023.

165. ヒレアミメキクイゾウムシ *Choerorhinus explanatus* Konishi, 1960

枯れ木積みの枯れ木のビーティングなどにより得られた。都区部からは明治神宮から記録されて

いる (岡田ら, 2013)。上田の観察によれば, 本種は都区部市街地内において珍しくはない。

<採集データ> 1 ex. UE, 19. v. 2022; 1 ex. UE, 16. v. 2024; 1 ex. UE, 23. v. 2024; 1 ex. UE, 14. vi. 2024.

166. オオナガキクイゾウムシ *Oxydema longula* (Boheman, 1859)

ビーティングにより採集された。本種は東京都本土部では稲城市からの記録がある (伊藤, 2015a)。

<採集データ> 1 ex. UE, 26. v. 2022.

167. コブキクイゾウムシ属の一種 *Xenomimetes* sp. (図7J)

覆馬場跡の枯れ木が積まれた近くに設置した吊下式ライトトラップで確認した。ハンノキコブキクイゾウムシ *X. alni* Konishi, 1955 または近縁種と思われるが特定に至っていない。

<採集データ> 1 ex. Y, 20. vi. 2024.

168. マツノシラホシゾウムシ *Shirahoshizo insidiosus* (Roelofs, 1875)

上道灌濠近くの枯れ木積みなどから得られた。同定には森本 (1962) を参照し, 辻尚道氏の協力を得た。本種は東京都本土部では八王子市から記録がある (岩田ら, 1991)。

<採集データ> 1 ex. UE, 10. x. 2024; 1 ex. UE, 24. x. 2024.

169. ウエノヒョウタンクチカクシゾウムシ *Hytotanzo uenoi* Morimoto, 1962 (図7K)

中道灌濠端の石垣の縁の落ち葉から得られた。本種の幼虫はオモトなどの根で生育するが, ここではヒガンバナを宿主とする個体群であったと思われる。本種は都区部では赤坂御用地と目黒区から記録されている (野村・森本, 2005; 目黒区, 2020)。

<採集データ> 2 exs. UE, 19. ix. 2024; 2 exs. UE, 3. x. 2024.

170. アシナガオニゾウムシ *Gasterocercus longipes* Kono, 1932 (図2H)

エノキの比較的新しい枯れ枝や倒木などに集まることが知られている。2025年6月に白鳥池近くでエノキの大木が倒れ, 多数の本種が観察された。また, 覆馬場跡の枯れ木が積まれた近くに設

置した吊下式ライトトラップでも確認した。

<採集データ> 1 ex. Y, 6. vi. 2024; 4 exs. M, 20. vi. 2025.

カミキリムシ科 Cerambycidae

171. キスジトラカミキリ *Cyrtoclytus caproides caproides* (Bates, 1873) (図7M)

チョウ目の調査員が滝見口門付近で採集した。東京都区部では少ないが、大田区、板橋区から記録されている。

<採集データ> 1 ex. 朝日純一採集, 21. v. 2025.

172. キイロトラカミキリ *Grammographus notabilis notabilis* (Pascoe, 1862) (図7L)

伐採木の近くに設置した吊下式ライトトラップや伐採木上のルッキングにより採集された。上田の観察によれば、本種は都区部で近年数を増やしつつある。

<採集データ> 1 ex. UE, 19. v. 2022; 3 exs. Y, 31. v. 2022; 1 ex. UE, 9. vi. 2022.

173. ヨツスジトラカミキリ *Humeromaculatus humeromaculatus* (Laporte et Gory, 1836) (図7N)

果樹園で飛翔して葉に止まった個体を採集した。関東地方では以前は神奈川県、千葉県等の沿岸地域で良く見られていたが、近年では内陸でも普通に見られるようになった。

<採集データ> 1 ex. Y, 10. vii. 2025.

174. カッコウメダカカミキリ *Stenhomalus stenhomalus cleroides* Bates, 1873 (図7O)

吹上大池脇のアケビの絡まった常緑樹のピーティングで採集した。都区部からの記録はないものと思われる。幼虫はアケビの枯れツル内に穿孔する。

<採集データ> 1 ex. Y, 28. iv. 2022.

175. トゲヒゲトビロカミキリ *Nysina rufescens* (Pic, 1923) 在来種 (国内外来または北上種) (図7P)

東京都本土部初記録。本州は千葉県房総半島最南部でしか記録 (初確認年は1978年 (諫川, 1980) である) されていなかったが、1995年に神奈川県三浦半島から確認され (露木, 2001)、神奈川県下では侵入種と考えられている。近年、急速に

関東平野中部から記録されるようになっており (井ノ上, 2009; 公文, 2012; 雛倉, 2019; 源河, 2021)、北上種と考えられる。幼虫はヤブニッケイ類の新しい枯死木を食べる。皇居でもヤブニッケイ枯れ枝のピーティングや伐採木の下面から採集された。山崎は覆馬場跡の枯れ木が積まれた近くに設置した吊下式ライトトラップで確認した。

<採集データ> 1 ex. M, 15. vi. 2023; 1 ex. M, 22. vi. 2023; 1 ex. KM, 6. vii. 2023; 2 exs. KM, 1 ex. N, 13. vii. 2023; 1 ex. Y, 6. vi. 2024.

176. イワサキケブカカミキリ *Eupogoniopsis granulatus* Lim, 2013 外来種 (図2I)

韓国から記載された種で、日本からは2015年採集の神奈川県下での発見を皮切りに、山梨県でもほぼ時を同じくして見つかった (露木・平山, 2017; 竹上, 2017)。東京都からは、日野市や青梅市など、西部地域から見つかったが (近藤, 2019; 谷川・森川, 2021)、区部からは今回、初めて確認された。日本では雄個体がみられず、単為生殖しているといわれる (露木・平山, 2017)。山崎は2024年5月に果樹園の林縁部で太い枝が折れて地上まで垂れ下がっているカジノキを確認した。この時は葉は青々とし花も付いていた。その後調査で入るたびにピーティング等を行ったが本種は確認されなかったが、9月12日の調査で初認し、翌週には多くの個体を確認した。秋に枯れ枝の一部を持ち帰ったところ翌年 (2025年) の5月~6月に多くの個体が羽化した。果樹園にあった枯れ枝は2024年の秋に片付けられたがその一部は近くに残されており、2025年7月調査時に1個体確認することができた。本種は初夏のころに成虫が見られることは知られているが、今回の確認状況から初夏と秋の2回発生している可能性がある。確認個体は、羽化した個体も含めすべて雌である。

<採集データ> 3 exs. Y, 12. ix. 2024; 10 exs. Y, 4 exs. UE, 19. ix. 2024; 3 exs. N, 26. ix. 2024; 5 exs. KM, 5. xii. 2024 (材採取), 12-24. v. 2025 (回収); 20 exs. Y, 21. xi. 2024 (材採取), 5.v.-11. vi. 2025 (回収); 1 ex. Y, 14. vii. 2025.

177. ヒトオビアラゲカミキリ *Rhopaloscelis unifasciatus* Blessig, 1873 (図7Q)

普通種で山地から低山地、丘陵地、平野部まで広く得られているが、都区部からは東京港野鳥公

園からのみ記録されていた (高桑ら, 2015).

<採集データ> 1 ex. KM, 4. iv. 2024.

178. センノキカミキリ *Acalolepta luxuriosa* (Bates, 1873) (図7R)

覆馬場跡でヤツデの枯葉をピーティングして得られた。都区部でも緑化で使われているキヅタで発生している。

<採集データ> 1 ex. Y, 5. ix. 2024.

179. ラミーカミキリ *Paraglenea fortunei* (Saunders, 1853) 外来種 (図2J)

道灌濠沿いのカラムシ葉上に多い。最近、都区部でもカラムシやムクゲで見られるようになった。都区部では、目黒区の東京大学駒場キャンパスから記録されている (Kishimoto-Yamada *et al.*, 2017)。外来種であるとともに、東進北上種とみなせる。「東京都外来種対策リスト2025」(東京都環境局, 2025) の中で、防除検討外来種に指定されている。

<採集データ> 2 exs. UE, 19. v. 2022; 2 exs. Y, 1 ex. N, 31. v. 2022; 1 ex. Y, 16. vi. 2022; 2 exs. UE, 18. v. 2023; 1 ex. Y, 25. v. 2023; 3 exs. Y, 8. vi. 2023; 5 exs. KM, 5 exs. N, 23. v. 2024; 1 ex. N, 18. vii. 2024.

ハムシ科 Chrysomelidae

180. ヤツボシハムシ *Gonioctena (Sinomela) nigroplagiata* Baly, 1862

エノキのスウィーピング及び吊下式ライトトラップで採集した。都区部において少ない種ではない。

<採集データ> 1 ex. Y, 26. v. 2022; 1 ex. UE, 9. vi. 2022; 1 ex. Y, 16. vi. 2022; 1 ex. Y, 13. iv. 2023; 1 ex. Y, 25. v. 2023; 1 ex. KM, 18. iv. 2024; 1 ex. UE, 9. v. 2024; 1 ex. UE, 30. v. 2024; 1 ex. Y, 20. vi. 2024; 1 ex. Y, 20. vi. 2025.

181. サメハダツブノミハムシ *Aphthona strigosa* Baly, 1874 (図7S)

アカメガシワの葉上で確認できるが本調査では落ち葉ふるいで確認した。

<採集データ> 1 ex. Y, 18. xi. 2021.

182. ヘリグロテントウノミハムシ *Argopistes coccinelliformis* Csiki, 1940

イボタのピーティングや林縁部のスウィーピン

グで得ている。前胸背の前縁の形状により同定した。上田の観察によれば、本種は都区部市街地内のヒイラギの生け垣などに普通に見られる。

<採集データ> 1 ex. KN, 9. vi. 2022; 1 ex. Y, 25. viii. 2022; 1 ex. Y, 6. iv. 2023; 1 ex. Y, 20. vii. 2023; 1 ex. Y, 18. iv. 2024; 1 ex. UE, 14. vi. 2024; 1 ex. UE, 22. viii. 2024.

183. ヒメテントウノミハムシ *Argopistes tsekooni* Chen, 1934 在来種 (国内外来または北上種?)

トウネズミモチのピーティング等で確認した。主に西日本に分布する種であるが、近年東京都都区部でもトウネズミモチなどで普通に見られるようになった。黒沢 (1982) は世田谷区で1980~81年に観察し、寄主植物を記録しているが、東京都では普通には確認されていなかった (南・滝沢, 2005)。近年では東京港野鳥公園 (酒井・高桑, 2015)、自然教育園 (野村ら, 2019) でも見ついている。近隣県 (茨城県, 千葉県, 埼玉県, 神奈川県) でも1960年代から1990年代の記録も存在しているが、東京都では近年増加傾向が顕著である。

<採集データ> 1 ex. UE, 15. x. 2021; 2 exs. UE, 28. x. 2021; 1 ex. Y, 18. xi. 2021; 4 exs. UE, 5 exs. Y, 21. iv. 2022; 1 ex. Y, 28. iv. 2022; 1 ex. UE, 12. v. 2022; 2 exs. Y, 26. v. 2022; 1 ex. Y, 9. vi. 2022; 2 exs. Y, 16. vi. 2022; 1 ex. UE, 21. vii. 2022; 1 ex. UE, 28. vii. 2022; 1 ex. UE, 9. viii. 2022; 1 ex. UE, 18. viii. 2022; 4 exs. Y, 25. viii. 2022; 1 ex. Y, 21. ix. 2022; 1 ex. UE, 21. x. 2022; 1 ex. UE, 28. iii. 2023; 2 exs. Y, 6. iv. 2023; 1 ex. Y, 18. v. 2023; 1 ex. Y, 20. vii. 2023; 1 ex. Y, 7. xi. 2023; 5 exs. KM, 18. iv. 2024; 4 exs. KM, 25. iv. 2024; 1 ex. Y, 26. ix. 2024; 1 ex. KM, 16. iii. 2025.

184. メリケントビハムシ *Disonycha politula* Horn, 1839 外来種 (図7T)

米国南部から中央アメリカにかけて分布する種であるが、2020年頃から日本に侵入し、茨城県南部を中心とした関東地方各地で発見されるようになった。日本では主にアオゲイトウ、ムラサキアオゲイトウ、ハリビユなどの外来のアオゲイトウ類を寄主植物としている (重藤ら, 2023)。皇居では林縁のスウィーピングで採集した。アオゲイトウ類と同じヒユ科のイノコヅチが多く見られたが、食痕は確認できず、またその後の調査でも追

加個体は得られなかった。

<採集データ> 2 exs. M, 18. vii. 2024.

185. オオアシナガトビハムシ *Longitarsus (Longitarsus) nitidus* Jacoby, 1885

食草となるヒルガオが混じった草地のスウィーピングによって得られた。区部でも各地で確認されている（大野，1981；大田区，1997；野村・平野，2005；野村ら，2019）。

<採集データ> 1 ex. UE, 6. vi. 2024; 5 exs. KM, 14. vi. 2024.

186. カラタチトビハムシ *Podagricomela weisei* Heikertinger, 1924 外来種

果樹園のナツミカンのスウィーピング、ピーティングで採集される。中国原産の外来種と考えられている（南ら，2016）。日本で最初に見つかったのは2006年の千葉市内で、その後、千葉県、東京都、茨城県、埼玉県で確認されているが、関東地方以外の記録はないようである。国立科学博物館附属自然教育園（東京都港区白金）でも発見されている（野村ら，2019）。カラタチのほか、さまざまな柑橘類を宿主植物とする。

<採集データ> 2 exs. UE, 24. iii. 2022; 4 exs. KM, 29. iii. 2022; 5 exs. UE, 5. iv. 2022; 1 ex. N, 21. iv. 2022; 2 exs. Y, 9. vi. 2022; 1 ex. UE, 9. vi. 2022; 1 ex. Y, 16. vi. 2022; 3 exs. UE, 16. iii. 2023; 4 exs. KM, 25. iv. 2024; 5 exs. Y, 26. iii. 2025.

187. サンゴジュハムシ *Pyrrhalta lineatipes* (Takei, 1916)

樹木のスウィーピングにより採集されたが、宿主としていた植物は不明である。上田の観察によれば、本種は都区部市街地内において植栽されたサンゴジュなどに大発生している例が多い。

<採集データ> 1 ex. UE, 9. viii. 2022.

188. エンジュマメゾウムシ *Megabruchidius sophorae* Tuda et Morimoto, 2004 外来種？

ケヤキ樹皮下で越冬中のところを採集した。同定にはTuda & Morimoto (2004)を参照した。本種は東京都本土部では明治神宮（岡田ら，2013）などから記録されている。上田の観察によれば、区部市街地内において少なくない。茨城県つくば市産の標本から記載され、日本以外からは知られていないが、寄主植物であるエンジュが中国原産

であることから、外来種の可能性が高いとされる（Tuda & Morimoto, 2004）。

<採集データ> 1 ex. UE, 9. ii. 2023.

189. クズクビボソハムシ *Lema (Lema) diversipes* Pic, 1921 外来種（図2K）

クズの葉上で確認した。隣接する北の丸公園の濠斜面のクズ葉上では多数の個体を観察している上田の観察によれば、本種は日本においては港区で2016年に初めて発見されて（南・上田，2018）以来、その周囲に徐々に分布を拡大中である。

<採集データ> 1 ex. UE, 5. x. 2021; 5 exs. N, 15. xi. 2021; 1 ex. N, 18. viii. 2022; 2 exs. Y, 1. ix. 2022; 2 exs. UE, 29. ix. 2022; 3 exs. N, 4. x. 2022; 1 ex. N, 26. x. 2022; 1 ex. UE, 18. v. 2023; 1 ex. Y, 6. vii. 2023; 1 ex. UE, 31. viii. 2023; 1 ex. Y, 7. ix. 2023; 1 ex. Y, 31. x. 2023; 1 ex. Y, 7. xi. 2023; 1 ex. KM, 25. iv. 2024; 4 exs. KM, 16. v. 2024; 4 exs. KM, 23. v. 2024; 1 ex. Y, 5. ix. 2024; 1 ex. Y, 14. xi. 2024.

190. イノコヅチカメノコハムシ *Cassida japona* Baly, 1874（図2L）

ヒメカメノコハムシ *Cassida piperata* Hope, 1842 とイノコヅチカメノコハムシはそれぞれ別種として記載されたが、後にイノコヅチカメノコハムシはヒメカメノコハムシのシノニムとされた。Borowiec (1999) はイノコヅチカメノコハムシを独立種として復活させ、南・滝沢 (2005) もイノコヅチカメノコハムシを独立種として東京都から記録した。野村ら (2000) では、ヒメカメノコハムシの項に「通常は上翅の側方に黒帯はないが、ときに黒帯が現れ、(中略) 皇居内でも両方の型が採集されている」とある。黒帯のないものがイノコヅチカメノコハムシに該当すると考えられるため、過年度も本種は皇居から採集されていたと見なされるが、本種としての記録は存在しないのでここに記録する。イノコヅチのスウィーピング、ピーティングにより採集された。

<採集データ> 2 exs. Y, 31. v. 2022; 1 ex. Y, 16. vi. 2022; 1 ex. Y, 18. viii. 2022; 1 ex. Y, 15. ix. 2022; 1 ex. Y, 19. ix. 2024; 1 ex. UE, 12. ix. 2024.

191. クロオビカサハラハムシ *Demotina fasciata* (Baly, 1874)（図7U）

果樹園のクヌギのスウィーピングで得たほか、覆馬場跡に設置した吊下式ライトトラップでも確

認した。

<採集データ> 1 ex. Y, 12. ix. 2024; 1 ex. Y, 26. ix. 2024; 1 ex. Y, 3. x. 2024.

192. マダラアラゲサルハムシ *Demotina fasciculata* Baly, 1874 (図7V)

覆馬場跡の枯れ木が積まれた近くに設置した吊下式ライトトラップで確認した。

<採集データ> 1 ex. Y, 20. vi. 2025.

193. カサハラハムシ *Demotina modesta* Baly, 1874

クヌギのスウィーピングなどによって得られた。東京都からは高尾山のほか、あきる野市、町田市、区部からは東京港野鳥公園、明治神宮から見つかっている(南・滝沢, 2005)。朝鮮半島からは雄個体も発見されているが(Isono, 1990b)、日本では単為生殖している可能性が疑われている(滝沢, 2009)。

<採集データ> 4 exs. UE, 29. vi. 2023; 5 exs. UE, 6. vii. 2023; 1 ex. UE, 10 exs. KM, 13. vii. 2023; 1 ex. UE, 10. viii. 2023; 1 ex. UE, 17. viii. 2023; 1 ex. UE, 24. viii. 2023; 1 ex. UE, 14. ix. 2023; 1 ex. UE, 3. x. 2023.

194. クシバアラゲサルハムシ *Demotina serriventris* Isono, 1990 在来種(国内外来または北上種?)

クヌギ・コナラおよびその周辺のスウィーピングにより採集した。同定にはIsono(1990a, b)を参照し、南雅之氏の協力を得た。本種は雌しか発見されておらず単為生殖をすると考えられている。台湾から記載された種で、ネパールからも記録されている。以前の国内分布は、九州以南の琉球が知られていたが、近年、稲城市からも発見されている(伊藤, 2024)。

<採集データ> 1 ex. UE, 5. x. 2021; 8 exs. UE, 25. xi. 2021; 1 ex. KM, 16. xii. 2021; 1 ex. KM, 5. vii. 2022; 8 exs. UE, 1. ix. 2022; 5 exs. UE, 29. ix. 2022; 2 exs. UE, 21. x. 2022; 1 ex. UE, 24. xi. 2022; 1 ex. UE, 28. iii. 2023; 1 ex. UE, 31. x. 2023.

195. イモサルハムシ *Colasposoma dauricum* Mannerheim, 1849

下道灌濠の草地で確認された。ヒルガオ、コヒルガオを寄主植物とし、都内でも区部を含め平地から低山地にかけて広く分布している(大野,

1974; 南・滝沢, 2005)。

<採集データ> 1 ex. KM, 6. vii. 2023.

196. ツヤキバネサルハムシ *Pagria flavopustulata* (Baly, 1874)

果樹園のクズが混じる草地のスウィーピングにより採集された。同定には今坂・南(2008)を参照した。従来ヒメキバネサルハムシ *Pagria signata* (Motschulsky, 1858) とされていた日本産種が、本種と次種を含む4種に区分された(今坂・南, 2008)。皇居からは野村ら(2000)によって分けられる前のヒメキバネサルハムシ(国外には分布)として記録されているが、それが4種のうちいずれに当たるのか、再検討を要する。

<採集データ> 1 ex. UE, 8. vi. 2023.

197. マルキバネサルハムシ *Pagria ussuriensis* Moseyko et Medvedev, 2005

果樹園のクズが混じる草地のスウィーピングにより採集された。同定には今坂・南(2008)を参照した。

<採集データ> 1 ex. UE, 3. x. 2023.

198. キボシツツハムシ *Cryptocephalus (Cryptocephalus) perelegans perelegans* Baly, 1873 在来種(国内外来または北上種?) (図7W)

樹木のスウィーピングにより得られた。都本土部では東京港野鳥公園から2013年に初めて確認されている(酒井・高桑, 2015)。島嶼部の八丈島では1970年代から採集例があるが、本土部では2012年以前の発見例はないようだ(鈴木・南, 2018)。上田の観察によれば、区部市街地において近年急増しており、それと比べると皇居内への進入は遅々としているように感じられる。

<採集データ> 1 ex. UE, 6. vi. 2024.

199. クロアシヒメツツハムシ *Coenobius picipes* Gressitt, 1942 (図7X)

クヌギの葉のスウィーピングによって得られた。東京都本土部では高尾山から記録されているが(南・滝沢, 2005)、区部からの記録はなかったものと思われる。

<採集データ> 3 exs. KM, 13. vii. 2023.

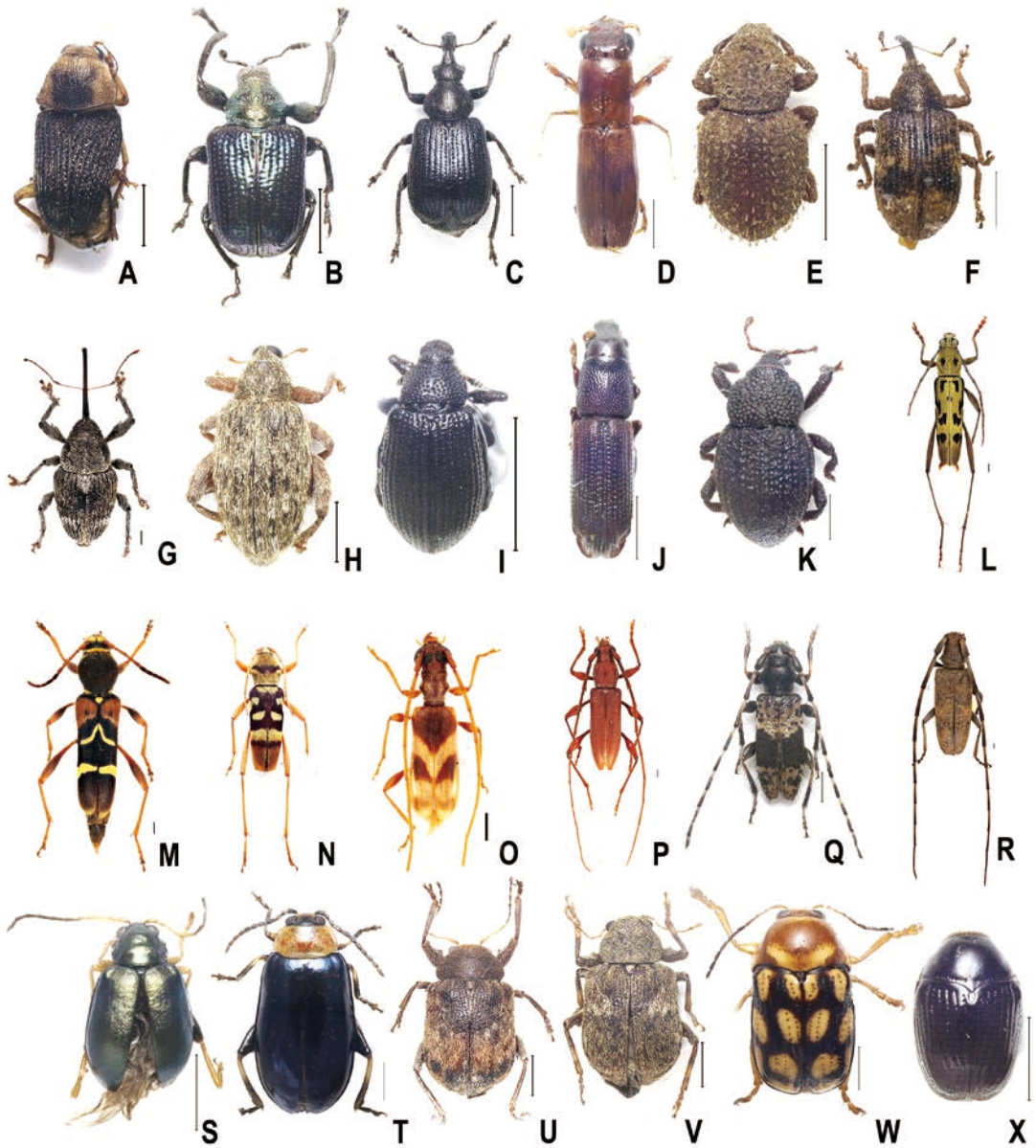


図7. 皇居から新たに記録される甲虫の標本写真5. A. カギバラヒゲナガゾウムシ属の一種; B. カシルリオトシブミ; C. マルムネチョッキリ; D. カシノナガキクイムシ; E. フトゲチビツチゾウムシ; F. オオクマハナゾウムシ; G. クヌギシギゾウムシ; H. カシワノミゾウムシ; I. リンゴノミゾウムシ; J. コブキクイゾウムシ属の一種; K. ウエノヒョウタンクチカクシゾウムシ; L. キイロトラカミキリ; M. キスジトラカミキリ; N. ヨツスジトラカミキリ; O. カッコウメダカカミキリ; P. トゲヒゲトビイロカミキリ; Q. ヒトオビアラゲカミキリ; R. センノキカミキリ; S. サメハダツブノミハムシ; T. メリケントビハムシ; U. クロオビカサハラハムシ; V. マダラアラゲサルハムシ; W. キボシツツハムシ; X. クロアシヒメツツハムシ. スケールはすべて1 mm.

考 察

以上、今回の調査によって、皇居産コウチュウ目として、新たに199種が記録された。第Ⅲ期の調査より以前に記録されている甲虫の種数は929種であり、単純に足し合わせると皇居から記録された甲虫の総数になるかというところはならない。例えば、本稿によってニセコウベツブゲンゴロウ（ゲンゴロウ科）が追加されたが、この種は野村ら（2000）によってかつて「コウベツブゲンゴロウ *Coperatus kobensis*」として記録されていた種であり、ニセコウベの登場によって、（真の）コウベツブの記録は抹消される。したがってこの種に関しては、プラス1マイナス1ということになり、種数の増減はない。このような例が複数あり、さらに2種増えて1種減るといった例もある。皇居から記録されている甲虫の総種数は、本稿で追加された種を含めて別稿で整理した結果、1,122種であった（野村ら、2026投稿中）。

外来種については、コウチュウ目ではそもそも全体の種数が極めて多く、個々の種について古くからの分布記録が詳細に判明しているケースは極めて少ないことから、他の動物群に比べると確実な数字を出すことは極めて困難と言わざるを得ない。在来種か外来種か？という二元論で割り切れるものではなく、在来種と外来種との間に多くの段階を設けざるを得ない。それでも多くの種のそれぞれで、在来種であるか外来種であるかの事情は複雑に異なっている。それを踏まえうえて、今回新たに得られた199種を外来種か否かという観点でつぶさに検討し、いくつかのカテゴリーに落とし込んでいくと次のような結果が得られた。1) 確実に外来種であることが判明しているものは9種（ムネハラアカクロテントウ、ムネアカオオクロテントウ、ベダリアテントウ、モンクチビルテントウ、イワサキケブカカミキリ、ラミーカミキリ、メリケントビハムシ、カラタチトビハムシ、クズクビボソハムシ）であった。また、2) 外来種の疑いが濃いが確実でないものは6種（タイワンタマキノコシバンムシ、シコクフタバシヒメテントウ、シセンクロテントウ、マメチビケシキスイ、アカチビケシキスイ、エンジュマメゾウムシ）であった。さらに、3) 確実に国内外来種であることが判明しているものは、リュウキュウツヤハナムグリ奄美大島亜種の1種である、また、4) 国内外来種、あるいは北上種の可能性が

高い種（疑問種も含む）は13種（ムネアカカナガタマムシ、オオカンショコガネ、ヒラタアオコガネ、アヤオビハナノミ、ヤマトスナゴミシダマシ、キボシコオニケシキスイ、トゲヒゲトビロカミキリ、カシノナガキクイムシ、オオクマハナゾウムシ、ヒメテントウノミハムシ、クシバアラゲサルハムシ、キボシツツハムシ）であった。加えて、5) 在来種と考えられるが疑問が残るもの（リスト中では「在来種？」で示した）は、シラホシハナムグリ、タイワンヒメトゲムシ、コセスジハバビロガムシの3種であった。今回リストアップされた199種の中で、在来種（疑問種も含む）と考えられるものが最も多く、184種（92.5%）に及んだ。それ以外のもの（確実に外来種か、外来種である可能性を払しょくできないもの=1+2）は合計15種（7.5%）であった。

事の性質上、皇居で新規に発見された新産種の中で、外来種または外来種の可能性のあるものは、全体の比率に比べれば多いと予想されるが、それでもやっと1割に満たない程度である。したがって現段階では、皇居に産する甲虫種の多くが外来種に入れ替わるというような深刻な事態には立ち至っていないと結論することができる。

謝 辞

本稿を草するにあたり、今回の調査について種々ご協力いただいた、宮内庁庭園課の方々には厚く御礼申し上げます。また、種の同定その他について貴重な情報をいただいた以下の方々にも篤く感謝の意を表したい（アイウエオ順、敬称略）：加藤敏行（北海道）、鈴木 互（群馬県）、辻 尚道（自然環境研究センター）、南 雅之（東京都）、吉田貴大（愛媛大学）。なお本研究に関連して第一著者野村は、日本学術振興会 科学研究費補助金基盤(B)（課題番号：21H02212；代表者：井手竜也）の助成を受けている。

引用文献

- 秋田勝己・益本仁雄、2016. 日本産ゴミムシダマシ大図鑑。月刊むし・昆虫大図鑑シリーズ9, 302 pp.
- 青井光太郎・西野洋樹・中村 涼、2024. チビクチビルテントウ属 *Telsimia* 3種の記録。さやばねニューシリーズ, (56): 3-4.
- Borowiec, L., 1999. A world catalogue of the Cassidinae (Coleoptera: Chrysomelidae). 476 pp.

- Biologica Silesiae, Wrocław.
- Cai, C., E. Tihelka, M. Giacomelli, J. F. Lawrence, A. Ślipiński, R. Kundrata, S. Yamamoto, M. K. Thayer, A. F. Newton, R. A. B. Leschen, M. L. Gimmel, L. Lü, M. S. Engel, P. Bouchard, D. Huang, D. Pisani and P. C. J. Donoghue, 2022. Integrated phylogenomics & fossil data illuminate the evolution of beetles. *Royal Society Open Science*, 9, 211771.
- 福田 浩, 1955. イボタロウカイガラヒゲナグゾウムシに関する生態学的研究I. 九州大学農学部学芸雑誌. 15(1): 15–23.
- 源河正明, 2021. 成田市におけるトゲヒゲトビイロカミキリの記録. 房総の昆虫, (68): 96.
- 林弥生子, 2024. 埼玉県初記録種アヤオビハナムミを採集. 寄せ蛾記, (192): 21.
- 芳賀 馨, 2007. 1970–90年代に奥多摩で採集した甲虫類. うすばしろ, (35): 1–46.
- 雛倉正人, 2013. 町田市三輪町で採集した歩行虫2種. 神奈川虫報, (179): 51–52.
- 雛倉正人, 2019. 座間市のトゲヒゲトビイロカミキリ. 神奈川虫報, (198): 69–70.
- 平野幸彦, 2009. 日本産ヒラタムシ上科図説 第1巻 ヒメキノコムシ科・ネスイムシ科・チビヒラタムシ科. 63 pp. 昆虫文献六本脚, 東京.
- 平野幸彦, 2010. 日本産 *Telmatophilus* 属 (キシイムシ科) について. 神奈川虫報 (170): 1 ex.
- 平野幸彦, 2010. 日本産ヒラタムシ上科図説 第2巻 ホソヒラタムシ科・キシイモドキ科・ムクゲキシイムシ科. 61pp. 昆虫文献六本脚, 東京.
- 平野幸彦, 2015. 日本産 *Aspidiphorus* マルヒメキノコムシ属について. 神奈川虫報, (185): 42–47.
- 久松定成, 1985. ヒメハナムシ科. 黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之 編, 原色日本甲虫図鑑 (Ⅲ), pp. 271–274, 277. 保育社, 大阪.
- Hisamatsu, S-T., 2005. A new species of the genus *Lasiodites* Jelinek (Coleoptera, Nitidulidae) from Japan. *Japanese Journal of Systematic Entomology*, 11(1): 155–160.
- Hisamatsu, S-T., 2019a. Discovery of *Meligethinus tschungseni* Kirejtshuk from Japan, the most eastward record of the genus *Meligethinus* Grouvelle (Coleoptera, Nitidulidae, Meligethinae). *Elytra*, New Series, 9(1): 117–119.
- Hisamatsu, S-T., 2019b. New records of *Fabogethes circularis* (J. Sahlberg, 1903) and *F. nigrescens* (Stephens, 1830) (Coleoptera, Nitidulidae, Meligethinae) from Japan. *Elytra*, Tokyo, New Series, 9(2): 349–351.
- Hoshina, H., 2020. Review of the genus *Pseudocolenis* Reitter, 1885 (Coleoptera: Leiodidae) from Japan. *Japanese Journal of Systematic Entomology*, 26: 305–312.
- 保科英人, 2021. 日本産 *Pseudocolenis*, *Pseudoliodes* 両属の分類学的諸問題, (Ⅱ). さやばねニューシリーズ, (43): 27–31.
- 池田正清, 2013. 東京都大田区で採集したハナムグリ/コガネ. 神奈川虫報, (181): 43–44.
- 今坂正一・南 雅之, 2008. 日本産 *Pagria* (キバネサルハムシ属) について. 佐賀の昆虫, (44): 253–263.
- 井ノ上健, 2009. 横須賀市のトゲヒゲトビイロカミキリ. 神奈川虫報, (166): 44.
- 井上昌次・伊澤和義, 2020. 地域の甲虫自然史第5号「愛知県のゾウムシ Weevils of Aichi Prefecture」追加と訂正. さやばねニューシリーズ, (40): 33–35.
- 諫川正臣, 1980. 千葉県南部で得られた南方系カミキリ3種, 月刊むし, (110): 38–39.
- Isono, M., 1990a. A revision of the genus *Demotina* (Coleoptera, Chrysomelidae) from Japan, the Ryukyus, Taiwan and Korea, I. *Japanese Journal of Entomology*, 58(2): 375–382.
- Isono, M., 1990b. A revision of the genus *Demotina* (Coleoptera, Chrysomelidae) from Japan, the Ryukyus, Taiwan and Korea, II. *Japanese Journal of Entomology*, 58(3): 541–554.
- 伊藤 淳, 2012. 東京都稲城市の甲虫類 (1). 神奈川虫報, (178): 21–28.
- 伊藤 淳, 2013. 東京都稲城市の甲虫類 (2). 神奈川虫報, (181): 1–13.
- 伊藤 淳, 2015a. 東京都稲城市の甲虫類 (4). 神奈川虫報, (185): 72–77.
- 伊藤 淳, 2015b. タイワンタマキノコシバンムシを東京都稲城市で採集. さやばねニューシリーズ, (19): 50.
- 伊藤 淳, 2016. 東京都稲城市の甲虫類 (5). 神奈川虫報, (188): 36–40.
- 伊藤 淳, 2017a. 東京都稲城市のゾウムシ科ヒ

- メゾウムシ亜科. 神奈川虫報, (192): 9-10.
- 伊藤 淳, 2017b. 東京都稲城市のゾウムシ科クチブトゾウムシ亜科. 神奈川虫報, (193): 63-67.
- 伊藤 淳, 2018. 東京都稲城市でオオタツマアカヒメテントウを採集. さやばねニューシリーズ, (31): 29-30.
- 伊藤 淳, 2019. 東京都稲城市でアカチビケシキスイを採集. さやばねニューシリーズ, (36): 30-31.
- 伊藤 淳, 2020a. 東京都稲城市でマメチビケシキスイを採集. さやばねニューシリーズ, (38): 32.
- 伊藤 淳, 2020b. カイヒメテントウの採集記録と形態. さやばねニューシリーズ, (39): 12-14.
- 伊藤 淳, 2020c. 東京都稲城市の甲虫 (8). 神奈川虫報, (202): 22-30.
- 伊藤 淳, 2021. 東京都稲城市の甲虫類 (9). 神奈川虫報, (205): 4-12.
- 伊藤 淳, 2023. 東京都稲城市の甲虫類 (11). 神奈川虫報, (209): 13-20.
- 伊藤 淳, 2024. クシバアラゲサルハムシを東京都稲城市で採集. さやばねニューシリーズ, (54): 4-5.
- 伊藤 淳・中村 涼・田中 努・青井光太郎・加藤敦史・上田衛門・関 峻大・田悟敏弘・佐々木英世, 2024. 日本と台湾の *Nosodendron* 属 *Dendrodipnis* 亜属 (ヒメトゲムシ科) について. さやばねニューシリーズ, (53): 28-36.
- 伊藤 淳・阪本優介, 2016. ツツノミゾウムシを東京都稲城市で採集. さやばねニューシリーズ, (21): 51.
- 伊藤 淳・阪本優介・歳清勝晴, 2018. 日本初記録のシセンクロテントウ (新称) を含む本州産チビクチビルテントウ属3種の記録. さやばねニューシリーズ, (29): 13-16.
- 伊藤弥寿彦, 2021. 第二次境内総合調査後に確認された昆虫類およびその他の陸生無脊椎動物. Pp. 126-132. 鎮座百年記念第二次明治神宮境内総合調査委員会 (編), 鎮座百年記念第二次明治神宮境内総合調査報告書第2報 (2021). 316 pp. 明治神宮社務所, 東京.
- 岩田隆太郎・山田房男・須田 到・榎原 寛・岩淵喜久男・永田健二, 1991. 針葉樹林における甲虫類誘引試験 (I) - 八王子市森林総研多摩森林科学園モミ林一, 第102回日本林学会大会発表論文集, P. 261-264.
- 伊澤和義・井上晶次・井井勝巳, 2009. 愛知県のゾウムシ類. 地域甲虫自然史, (5): 1-70.
- 亀澤 洋・野村周平・内海幸弘・渡部晃平, 2025. 東京都千代田区皇居から新たに記録されるニセコウベツブゲンゴロウ. さやばねニューシリーズ, (57): 34-36.
- 笠原須磨生, 1984. 大田区の歩行虫類. 63-72pp, 大田区の昆虫, 大田区自然環境保全基礎資料調査報告書, 136 pp.
- 環境省, 2025. 我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト<動物>. 生態系被害防止外来種リスト (<https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/iaslist.html>) (2025年10月16日閲覧)
- 岸本英成・望月雅俊・北野峻伸, 2013. 日本国内におけるハダニクロヒメテントウ (新称) *Stethorus pusillus* (Herbst) の再発見およびキアシクロヒメテントウ *Stethorus japonicus* H. Kamiya との区別点, 日本応用動物昆虫学会誌, 57(1): 47-50.
- Kishimoto-Yamada, K., Yamasako, J., Kato, T., Saito, M. & M. Ito, 2017. Fauna of Cerambycidae (Insecta: Coleoptera) in Komaba Campus of the University of Tokyo, a highly urbanised area in Japan. Biodiversity Data Journal, 5: e22296. <https://doi.org/10.3897/BDJ.5.e22296>
- Kitano, T., 2008. Two new species of the ladybird beetles from Japan and Taiwan (Coleoptera, Coccinellidae). *Japanese Journal of Systematic Entomology*, 14(2):319-322.
- Kitano, T., 2019. Taxonomical notes and descriptions of Japanese Halyziini (Coleoptera: Coccinellidae). *Studies and Reports*, 15(2): 371-382.
- 小林卓也, 2020. ツヤツツキノコムシ属4種の記録と和名. さやばねニューシリーズ, (40): 56-57.
- Kobayashi, T. & T. Sota, 2019. Divergent host use among cryptic species in the fungivorous ciid beetle *Octotemnus laminifrons* (Motschulsky, 1860), with descriptions of three new species from Japan, *Systematic Entomology*, (44): 179-191.
- 小島弘昭・亀澤洋・鈴木互・鶴智之・後藤秀章・野村周平, 2014. 皇居における衝突誘引式ト

- ラップで得られた甲虫. 国立科学博物館専報, (50): 325–358.
- 近藤巳倫, 2019. 東京都におけるイワサキケブカカミキリの記録. 月刊むし, (583): 61.
- Kôno, H., 1930. Langrüssler aus dem japanischen Reich (Schluss). *Insecta Matsumurana*, **5**(1and2): 1–31.
- Kôno, H., 1939. Neue und wenig bekannte Käfer Japans 6. Gattung *Anthonomus* (Col. Curc.). *Insecta Matsumurana*, **13**(2and3): 76–80.
- 公文 暁, 2012. 茨城県におけるトゲヒゲトビイロカミキリの記録. 月刊むし, (499): 26–28.
- 黒沢良彦, 1982. ヒメテントウノミハムシの加害植物. 甲虫ニュース, (56): 8.
- 松原 豊・雛倉正人, 2016. コウチュウ目 COLEOPTERA. 新八王子市史自然調査報告書 八王子市動植物目録, P. 296–379.
- 目黒区, 2020. 目黒区の甲虫. 24 pp. 目黒区都市整備部みどり土木政策課みどりの係, 東京.
- 南 雅之・宮内博至・滝沢春雄・斉藤明子・深谷信一・鳥倉英徳, 2016. 外来種カラタチトビハムシ (新称) における知見. 月刊むし, (544): 44–47.
- 南 雅之・滝沢春雄, 2005. 東京都本土部のハムシ. 神奈川虫報, (149): 1–21.
- 南 雅之・上田衛門, 2018. 国内初記録の外来種クズクビボソハムシ (新称) における知見, 月刊むし, (568): 23–25.
- みつ池を育てる会, 2019. みつ池の昆虫の記録. Pp. 137–172, 2018年成城みつ池緑地活動報告書 (2018年1月~12月). No. 17.
- 森本 桂, 1962. 森林害虫として記録されているゾウムシ類の種名について I. マツノシラホシゾウムシ. 林業試験場研究報告, (135): 35–46.
- Morimoto, K., 1984. The family Curculionidae of Japan. IV. subfamily Rhynchaeninae. *Esakia*, (22): 5–76.
- Morimoto, K., Kojima, H. & S. Miyakawa, 2006. The insects of Japan. Vol. 3. Curculionoidea: General introduction & Curculionidae: Entiminae (Part 1). Phyllobiini, Polydrusini and Cyphicerini (Coleoptera), 406 pp., Touka Shobo Co. Ltd., Fukuoka.
- Morimoto, K. & S. Miyakawa, 1985. Weevil fauna of the Izu Islands, Japan (Coleoptera). *Mushi*, **50**(3): 19–85.
- Morimoto, K., Nakamura, T. & Kannô, K. 2015. The insects of Japan. Vol. 4. Curculionidae: Entiminae (Part 2) (Coleoptera). 758 pp., Touka Shobo Co. Ltd., Fukuoka.
- 森本 桂・遠田暢男, 1962. イネゾウモドキ属に関する知見. 林業試験場研究報告, (146): 13–31.
- Morita, S., 1992. Occurrence of a new *Badister* (Coleoptera, Carabidae) in Tokyo, Japan. *Elytra*, **20**(2): 155–159.
- 森田 誠司, 2018. 対馬から *Harpalus aenigma* ニセケブカゴモクムシ (新称) の記録. *KORASANA*, (88): 11–12.
- 中島 淳・林 成多・石田和男・北野 忠・吉富博之, 2020. ネイチャーガイド日本の水生昆虫. 351p, 文一総合出版.
- 中村 涼, 2021. 東京都におけるササジツツガタシバンムシの記録. さやばねニューシリーズ, (41): 51.
- 中村 涼, 2024. 奈良県のクロヒメトゲムシとタイワンヒメトゲムシの記録. さやばねニューシリーズ, (55): 46.
- Nakane, T. & Nobuchi, A., 1955. On a new genus and six new species of Ciid-beetles from Japan (Ciidae, Coleoptera). The Scientific Reports of the Saikyo University. *Natural Science and Living Science*, **2**(1): 47–52.
- 直海俊一郎, 1997. 千葉県にてオオカンショコガネを発見. 房総の昆虫, (19): 23.
- Naomi, S.-I., Nomura, S. & Puthz, V. 2017. The subfamily Steninae Macleay, 1825 (Coleoptera: Staphylinidae) of Japan. Part 1. *Dianous* and *Stenus* (*S. comma* group to *S. guttalis* group). *National Museum of Nature and Science Monographs*, (46): 1–339.
- Nishikawa, M., 1992. New lowland *Sciodrepoides* (Coleoptera, Cholevidae) from the Kwanto plains, central Japan. *Elytra*, **20**(2): 197–201.
- 野村周平, 2011. FITかけある記 その4: 虫屋の手が及んでいない領域へ. 月刊むし, (482): 33–40.
- 野村周平・藤倉健一, 2011. 東京都檜原村三頭山「檜原都民の森」でFITにより採集したムクゲキノコムシ. さやばねニューシリーズ, (1): 7.

- 野村周平・平野幸彦, 2005. 赤坂御用地ならびに常盤松御用邸の甲虫相. 国立科学博物館専報, (39): 183-223.
- 野村周平・平野幸彦・斉藤明子・上野俊一・渡辺泰明, 2000. 皇居の甲虫相. 国立科学博物館専報, (36): 185-255.
- 野村周平・上條哲也・市野澤慎, 2006. 皇居における空中浮遊性甲虫の多様性と動態—2004年度地上FITによる調査. 国立科学博物館専報, (43): 187-240.
- 野村周平・河合智孝・亀澤 洋・青木淳一・平野幸彦, 2014. 皇居において枯木および枯木積に見られる甲虫相とその個体数変動. 国立科学博物館専報, (50): 279-309.
- 野村周平・丸山宗利・新井志保, 2006. 皇居における土壌性ハネカクシ類の多様性モニタリング. 国立科学博物館専報, (43): 161-186.
- 野村周平・松原 豊・上田衛門・亀澤 洋・山崎裕志・金子直樹・樽宗一朗・柿添翔太郎・内海幸弘・大島千幸, 2026. 皇居産甲虫目録(第I期~第III期). 国立科学博物館専報, (54): 107-137.
- 野村周平・松原 豊・山崎裕志・上田衛門・亀澤 洋, 2019. 国立科学博物館附属自然教育園(東京都港区白金)産甲虫類目録. 自然教育園報告, (51): 37-71.
- 野村周平・森本 桂, 2005. 赤坂御用地ならびに常盤松御用邸の土壌性ゾウムシ相. 国立科学博物館専報, (39): 173-181.
- 野村周平・村木朝陽・佐藤 尊, 2014. 皇居における大型甲虫の発生状況と高度分化. 国立科学博物館専報, (50): 311-323.
- 野村周平・上田衛門・松原 豊・山崎裕志・亀澤 洋・金子直樹・樽宗一朗・柿添翔太郎・内海幸弘・大島千幸, 2023. 東京都千代田区皇居から新たに記録されるハナムグリ3種. さやばねニューシリーズ, (52): 6-9.
- Ohbayashi, N., 1977. Revisional study of Dermestidae (Coleoptera) from Japan, I. *Konchu*, **45**(3): 349-359.
- 大原昌宏, 1997. 日本産エンマムシ上科概説 VII. 甲虫ニュース, (120): 1-5.
- 大平仁夫・下山健作, 1989. 青森県に産する *Actenicerus* 属のコメツキムシについて. 青森県立郷土館調査研究年報, (13): 43-56.
- 大野正男, 1974. 都市環境下におけるハムシ科甲虫の分布. Pp. 93-128, 沼田真編, 都市生態系の特性に関する基礎的研究, (昭和48年度).
- 大野正男, 1981. 自然教育園のハムシ相. 自然教育園報告, (12): 3-19.
- 大田区, 1997. 大田区自然環境保全基礎資料調査報告書. 大田区の昆虫. 223p.
- 大山健太・矢崎耀一, 2018. 本州におけるウスモンガマキスイの記録, 月刊むし, (574): 18.
- 岡田圭司・平野幸彦・新里達也, 2013. 明治神宮の甲虫類. Pp. 283-330, 鎮座百年記念 第二次明治神宮境内総合調査報告書, 510 pp.
- 緑生研究所・板橋区役所土木部公園緑地課編, 1986. 板橋区の昆虫類. 板橋区昆虫類等実態調査: 3-133. 東京都板橋区.
- 齋藤 理・大木 裕, 2023. 神奈川県横浜市におけるタイワンヒメトゲムシの記録. さやばねニューシリーズ, (49): 52-54.
- 齋藤孝明, 2024. 真冬の夜間に活動する地表性甲虫(主にオサムシ科ゴミムシ類). 神奈川虫報, (213): 15-20.
- 酒井 香, 2004. 東京都のカッコウムシ科(本土篇). 神奈川虫報, (145): 61-65.
- 酒井 香・高桑正敏, 2015. 東京港野鳥公園のハムシ・ゾウムシ類. 神奈川虫報, (186): 34-39.
- 酒井 香・高桑正敏・太田祐司, 2015. 東京港野鳥公園の甲虫類(一部). 神奈川虫報, (186): 40-46.
- 酒井 香・岸本年郎・高桑正敏, 2015. 東京港野鳥公園のコガネムシ科. 神奈川虫報, (185): 11-14.
- Sakai, M., 2007. *Gastrallus sasaji*, a new anobiid species from Japan (Coleoptera: Bostrichoidea: Anobiidae). *Japanese Journal of Systematic Entomology*, **13**(2): 387-390.
- 阪本優介, 2021. テントウムシハンドブック. 88 pp. 文一総合出版, 東京.
- 佐々治寛之, 2001. ムネハラアカクロテントウ(和名新称) *Rhyzobius lophanthae* の日本からの新記録. ねじればね, (93): 13-15.
- 沢田和宏, 1989. 東京都世田谷区のエンマムシ. 多摩虫, **11**(24): 3-4.
- 関 峻大, 2022. 東京都と神奈川県におけるクリサキテントウの記録と若干の知見. 神奈川虫報, (208): 33-38.

- Senda, Y. & Y. Obae, 2022. Notes on the Ecology of *Orochares debilis* Sharp (Coleoptera: Staphylinidae: Omaliinae). *The Coleopterists Bulletin*, 76(3): 390–393.
- 重藤裕彬・滝沢春雄・坂本紀之・西元重雄・吉武啓, 2023. 日本に侵入・定着したメリケントビハムシ. 月刊むし, (626): 10–16.
- 侵入生物データベース, 2025. 日本の外来種全種リスト, 甲虫類 (暫定リスト). 国立研究開発法人国立環境研究所 https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/resources/listja_coleoptera.html (2025年10月13日閲覧)
- 菅谷和希, 2021. 杜の生長と生物の動態—昆虫類 (飛翔性昆虫類) —. 鎮座百年記念第二次明治神宮境内総合調査報告書 第2報(2021), Pp. 33–46.
- 須黒達巳, 2022. 慶應義塾幼稚舎で記録された昆虫およびクモ. *Niche life*, (9): 36–67.
- 須黒達巳・野崎 翼・橋爪拓斗, 2022. 慶應義塾幼稚舎で採集されたハネカクシ. *Niche life*, (10): 66–68.
- 鈴木邦雄・南 雅之, 2018. キボシツツハムシとムツキボシツツハムシ (ハムシ科, ツツハムシ亜科) の地理的分布と寄主植物. さやばねニューシリーズ, (30): 10–21.
- 高桑正敏, 2000. 日本産ハナノミ科ハナノミ族概説4. 甲虫ニュース, (129): 1–6.
- 高桑正敏・太田祐司・酒井 香, 2015. 東京港野鳥公園のカミキリムシ. 神奈川虫報, (185): 7–10.
- 高桑正敏・酒井 香, 2015. 東京港野鳥公園のテントウムシ類. 神奈川虫報, (186): 24–26.
- 高桑正敏・酒井 香・野村周平・滝沢春雄・岸本年郎・太田祐司・亀澤 洋, 2018. 東京港野鳥公園の甲虫類—2015年4月～2017年11月の調査で追加された種—. 神奈川虫報, (196): 47–56.
- 滝沢春雄, 2009. 日本産ハムシ科生態覚書. 神奈川虫報, (168): 1–11.
- 竹上敦之, 2017. 日本初記録と同時期に山梨県大月市で採れていたイワサキケブカカミキリ. 月刊むし, (562): 32.
- 谷川栄一・森川清志, 2021. 東京都青梅市及びあきる野市においてイワサキケブカカミキリを採集. うすばしろ, (64): 13.
- 東京都板橋区, 1991. 板橋区昆虫類等実態調査 (II). 東京都板橋区, 186 pp.
- 東京都環境局, 2023. 東京都レッドデータブック (本土部) 2023—東京都の保護上重要な野生生物種 (本土部) 解説版—. 879 pp., 東京.
- 東京都環境局, 2025. 東京都外来種対策リスト 2025. 56 pp., 東京.
- Tuda, M. and K. Morimoto, 2004. A new species *Megabruchidius sophorae* (Coleoptera, Bruchidae), feeding on seeds of *Styphnolobium* (Fabaceae) new to Bruchidae. *Zoological Science*, 21(1): 105–110.
- 露木繁雄, 2001. トゲヒゲトビイロカミキリが神奈川県三浦半島で採集される. 月刊むし, (370): 12.
- 露木繁雄・平山洋人, 2017. 日本初記録の外来種と思われるホソヒゲケブカカミキリ属のカミキリ *Eupogoniopsis granulatus*. 月刊むし, (554): 36–39.
- 上田衛門, 2011. 東京都目黒区におけるクロホシクチキムシの観察例. 月刊むし, (486): 46–47.
- 上田衛門, 2017a. キクイツツキノコムシを東京都心部にて採集, 月刊むし, (553): 52–53.
- 上田衛門, 2017b. ヤマトスナゴミムシダマシの東京都品川区における観察, 神奈川虫報, (191): 84–85.
- 上田衛門, 2020. キボシコオニケシキスイを東京都区部で採集. 月刊むし, (598): 21–22.
- 渡辺一夫, 2015. 東京都で採集した珍しいタمامシ6種の記録. 月刊むし, (537): 48–49.
- Watanabe, Y., 1990. A taxonomic study on the subfamily Omaliinae from Japan (Coleoptera, Staphylinidae). *Memoirs of the Tokyo University of Agriculture*, Tokyo, 31: 55–391.
- 渡 弘, 2004. 横浜市でオオカンショコガネを採集. 神奈川虫報, (147): 68.
- 山本周平・渡辺恭平, 2009. 多摩川河川敷におけるゴミムシ類の記録. 神奈川虫報, (166): 1–14.
- 山崎秀雄, 2019. 東京都立葛西臨海公園のコムシ類を主とした生息調査報告. るりぼし, (48): 39–56.
- 吉田 進, 1999. 町田市で採集されたハネカクシ科甲虫数種. 神奈川虫報, (126): 37–38.
- Yoshihara, K. 2016. The insects of Japan. Vol. 6. Coleoptera, Curculionidae, Baridinae. 171 pp.,

Touka Shobo Co. Ltd., Fukuoka.

吉武 啓・栗原 隆・吉松慎一・中谷至伸・安田
耕司, 2011. 農業環境技術研究所所蔵の土生
昶申コレクション (昆虫綱: コウチュウ目:
オサムシ科) 標本目録. 農業環境技術研究所
報告, (28): 1-329.

Yoshitomi, H., 2005. Systematic revision of the family
Scirtidae of Japan, with phylogeny, morphology
and bionomics (Insecta: Coleoptera, Scirtoidea).

Japanese Journal of Systematic Entomology,
Monographic Series, (3), 212 pp.

吉富博之, 2015. チビマルハナノミ属 *Cyphon* の
解体. さやばねニューシリーズ, (17): 8-10.

Yoshitomi, H., Kishimoto, T. and C.-F. Lee, 2015. The
family Nosodendridae (Coleoptera: Derodon-
toidea) of Japan and Taiwan. *Japanese Journal of*
Systematic Entomology, **21**(1): 35-58.

